
「封魔の城塞アルデガン」

ふしじろ もひと

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「封魔の城塞アルデガン」

【Nコード】

N0012BA

【作者名】

ふしじろ もひと

【あらすじ】

「アルデガン」シリーズの本編にして最も早い時期に書いたもので、RPGのプレストリーによくある人の世の乱れが閉ざされていた魔物を解き放つ話そのままの展開です。東の地を去った最晩年のアールダが北の国ノールドに建立した城塞都市アルデガンが、200年後に破られるお話となります。

このシリーズの他の作品と同様、某SNSで5年前に書いたものの転載です。

第1部 城塞都市の翳り

羽田健太郎氏の霊と、いと昏き
Wizardryの思い出に。

<目次>

第1部 城塞都市の翳り

第1章 プロローグ

第2章 訓練所

第3章 洞門

第4章 路上

第5章 洞門

第6章 ラーダ寺院

第7章 寄宿舍

第8章 見張り台

第9章 集会所

第10章 私室

-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-

第1部 城塞都市の翳り

第1章 プロローグ

暗黒に閉ざされた大地を、滝のような雨が打ちすえていた。

ごうごうたる轟きのなか、男は激しく背後を振り仰いだ。都市を取り巻く巨大な城壁がしぶきにつつまれているのが、暗闇のなかにかろうじて認められた。

若者の顔がゆがんだ。それは炎の紋をあしらったローブにたたきつける氷雨のためでも、えぐられ焼けただれた左目の痛みのためでさえなかった。今逃れでた城塞都市への、その地下に封じられた数多の怪物たちへの、なによりもそれらを越え得ぬおのれの無力さへの限らない憎悪のあらわれであった。

彼は呪った。たとえ何年かかろうと、命を捨てることになるうとも、この地を焼き滅ぼす秘術をあみださずにはおかぬと。

「ラアルダーーっ！」

若き火術師の叫びは、しかし轟く豪雨の響きに吞まれ、誰の耳にもとどくことがなかった。

<封魔の城塞>と呼ばれた城塞都市アルデガンの建立は人間と魔物との抗争史における新たな時代の幕開けであった。

第三暗黒期にエルリア大陸北部の洞窟へ幾多の魔物たちを封じた尊師アールダは、偉大なる力を持つ僧であったが定命の人間である

ことに変わりにはなかった。そのためアールダは魔物たちを封じた洞窟の真上に城塞都市を築き優れた戦士や連達の術者たちを定住させることで魔物の地上への侵略を永く防ごうとしたのである。

だがそれからわずか200年後、人間の力の結集であつたはずのこのく封魔の城塞>は深い翳りに包まれようとしていた。

そして、さらに20年後……。

第2章 訓練所

激しい気合いの声が巨大な城壁にこだました。朝霧を断つ若者の一撃を大男の木刀がまっこうから受けた。

赤毛の若者はすばやく身を引き、隙なく身構えたまま大男と相対した。細身だが鍛えられた体に闘気をみなぎらせ、鳶色の目で相手を見えるその姿には巢立ちをむかえた鷹にも似たまっすぐな覇気が満ちていた。

若者の気迫を正面から浴びながら、だが大男の構えには小ゆるぎもなかった。白いものがめだつ剛毛と赤銅色の巨体をおおう数知れぬ傷跡がぐり抜けた修羅場を伺わせているが、灰色熊のようなその姿に老いの影はなく、重く、堅く立ちはだかっていた。

「まだまだっ！」

掛け声とともに若者がさらに数度、角度をかえて師を襲った。真剣とまがう音をたてて2つの木刀が噛み合った。

「よし」大男の口元がわずかにゆるんだ。

「腕をあげたな。アラード」

精悍な若者の顔が少年のように輝いた。

「光栄です。ボルドフ隊長」

ボルドフは構えを解いた。

「おまえの剣は訓練生の誰よりも速い。さらに磨くがよい。破壊力は体格とともに伸びてこよう。これからは実戦でカンをやしなうことだ」

アラードの息がはずんだ。「では、私を！」

「洞門番に登用する。午後からの班だ。昼食後に詰所へゆけ」

ボルドフは表情をひきしめ、付け加えた。

「生き延びろ、アラード」

挨拶もそこそこにアラードは訓練所をでた。胸のたかぶりは抑えようもなかった。長く厳しい訓練をおえた誇りと自信がきたる戦いへの闘志となって満ちていた。

だが、見おくるボルドフの顔は厳しかった。アラードの天分がいかに非凡であれ、怪物との戦いに勝ち残るためには今の彼に欠けている破壊力がどれほど重要かを知り抜いていたからだ。開いたまま

の戸口を見すえるその目には、育ちきらぬ戦士といえども消耗戦へ投入せざるをえない現状への憤りが黒々と燃えていた。

澄んだ少女の声が複雑かつ精妙な韻律の言葉を、信じがたいなめらかさで紡ぎだした。

華奢な色白の少女だった。淡い金髪を後頭部でたばね、簡素な胴着を着たほっそりした姿は、かよい印象さえ与えかねないものだった。

だが彼女の呪文は石壁で囲まれた大広間の空間に作用し、大きな力を秘めた特殊なく場をつくりだした。唱えた者の意のままに、いかようにも状態を変えうる小規模な力オスを……。

しかし、それはいかなる形もとることなくゆらぎ、消滅した。少女の青い瞳に落胆の影がおちた。

「集中できないようね、リア」肩を落とす少女に、いつの間にか壁際で見守っていた白い長衣の女が声をかけた。

「アザリア様！」

アザリアと呼ばれた女は少女を招いた。上背のある身体に長衣を着こなした女の姿勢には、優美でありながら居ずまいを正させずにはおかぬ強さがあつた。しかしその灰色の目の光は決して人を威圧するものではなかった。

アザリアはリアに椅子をすすめ、自らも真向かいに腰をおろした。「あなたには素質はあるのよ、リア。四大元素に働きかけ使役する

だけの魔力と技能はね。でも心がためらっているわ」アザリアは言葉^{ことば}を切^きって、リアを見つめた。「魔物^{まぶつ}たちをただ憎^{にく}むことはできそうにないわね」

リアは顔をあげた。「魔物^{まぶつ}たちが脅威^{きょうゐ}だとはわかっています。父も魔物^{まぶつ}との戦^{いくさ}いで命^{いのち}を落としました。でも！」

リアは両耳^{りょうみみ}をおさえた。

「あのときの怪物^{かいぶつ}の断末魔^{だんまつま}が耳^{みみ}を離れないんです。命^{いのち}への執着^{しよく}の魂^{たま}切^きるような！ 私が殺^{ころ}した……」

アザリアはため息^{ためいき}をついた。

「あなたの素質^{そしつ}の中で最高^{さいこう}なのがよりによって感応力^{かおうりき}だなんて。そんなものがなければどれほど楽^{やす}でしょうに」

彼女はリアの肩^{かた}にそっと手をかけた。

「でも、あなたはアルデガンに必要な^{ひつぎん}のよ。あなたほどの素質^{そしつ}に恵^{めぐ}まれた者の、つらくてもそれが勤め^{しんめ}なのよ」

アザリアのまなざしが、ふと宙^{そら}をさまよった。

「誰^{たれ}にでもかわりができることではないわ」

リアは知^しっていた。名付け親^{なづけおや}でもある師^しの豊かな亚麻色^{あしないろ}の髪^{かみ}のかげにむごい傷^{きず}がかくれているのを。若いころ師^しは闘^{たたか}いのさなかに瀕^{ひん}死^しの重傷^{じゅうけう}を負^おい、高位^{こうゐ}の魔法^{まほう}に必要な精神^{しんしん}の集中^{しゆくしゆ}は死^しをもたらすと宣告^{せんこく}された。以来^{いらい}アザリアは前線^{ぜんせん}をしりぞき若い術者^{じゆしや}の育成^{いくせき}に専念^{せんねん}してきた。

だが、その中の少なからぬ若者^{わかしや}たちが絶え間^{つぎひら}ない魔物^{まぶつ}との消耗戦^{しょうしやくせん}の犠牲^{ぎせい}になっていた。戦士^{せんし}であれ術者^{じゆしや}であれ勝ち残^{かちのこ}る力^{ちから}を持つ者^{もの}にしか果た^{はたら}すことのできない務め^{むめ}、それが彼ら^{かれら}に課^かされた過酷^{かこく}な義務^{ぎむ}

だった。

「意志の力がすべてなのよ」師の声にリアは我に返った。

「混沌を作りだすことさえできれば、あとはあなたの意志の力でどんなことでもできるの。僧侶たちのく奇跡>だって彼らは神の御業と言っけれど、ゆるぎない信念に支えられた魔法とも言えるのよ。それに」

アザリアの視線がふたたび彼方に向けられた。

「20年前、私は1人の火術師の信じられない力を見たことがあるわ」

アザリアは仲間たちと焼けこげた洞窟を駆けた。火術師の進んだ道はまちがえようがなかった。そこかしこに犬のような顔のコボルトや巨躯のオーガなどがなかば炭化した骸をさらしていた。アザリアたちは煙にせき込みながら走った。

彼らは下層に達しようとしていた。魔物たちの死体は驚くべき数だった。ラルダが吸血鬼にさらわれたとの知らせがああ、瘦身の火術師から信じ難い破壊力を引き出したのだ。だがとつくに限界に達しているはずだ。しかもこのあたりには炎に耐性のある魔物もいる。

突然前方が明るくなった。ついで地鳴りのような爆発音がとどろいた。

「あそこだ！」誰かが叫んだ。

その声が誰のものか確かめるより早くアザリアは転移の呪文を唱

えた。

視界がひらけた瞬間アザリアの目に飛び込んだのは、消耗しつくしてくずおれる火術師と焼けただれながらもなお荒れ狂う巨人の姿だった。巨人は倒れ伏す長衣の若者に焼けた岩のごとき拳を振り上げた。呪文を唱えても間に合わない！

「ガラリアン！」アザリアは叫び身を投げ出した。
苦しまぎれの、しかし巨大な一撃が彼らをかすめた。

「私の意識が戻ったとき、ガラリアンは姿を消したあとだった。左目を失ったということだったわ」

アザリアはリアに目を向けた。「彼の場合は想い人が洞窟で消息を絶ったことがあれだけの力を引き出すことになった。あなたも自分が戦う意味を見つけさえすれば力を発揮できるのよ。あなた自身が生き残るためでもあるし、素質の劣る者を死地から救うためでもあるのよ」

そう語る師の顔に苦渋の色が浮かんでいるのをリアは見た。かつては非凡な魔術師であったこの女性がいかに自らの無力ゆえに救えなかった人々のことで苦しみ続けてきたか、手に取るようにわかった。

「さきほど大司教閣下から旅に出るよう命じられたわ」
意外なアザリアの言葉にリアは驚いた。師の視線はまっすぐ自分に向けられていた。

「魔物たちがこの地に封じられて年月がたつうちに諸国からの援助が途絶えがちになってきているのは知っているわね。アルデガンへの物資の援助や人材の派遣は今ではこの地に接する北部地方に限られ、私たちはすっかり守勢にまわって洞窟の掃討どころか洞門を守るのがやっとという状況になっている」

リアはうなづいた。父親も洞門を守る闘いで部下を庇い命を落としたのだ。

「西部地域の内乱は収まることを知らず、南部にも不穏な動きがあるわ。このままでは遠からずアルデガンは破られてしまう。大司教閣下は諸国の状況を見てこいと、そしてアルデガンに、ひいては私たち人間すべてに危機が迫っていることを訴えるようにとおっしゃったわ」

アザリアは教え子の手を取った。

「いつしよに来なさい、リア。私たちが守っているものが何なのかを知るために。あなたならその真実から自分の戦う意味を見つけ出せるはずよ」

第3章 洞門

アラードが洞門番になって一刻もたたずに、彼らはコボルトの群

れを迎え撃った。

亜人と称されるコボルトは犬に似た顔を除けば小柄な人間のように見え、粗末な胴着や蛮刀を作ることでもできた。豚に似たオークともども人間にとっては生活の場における厄介な競争相手であり、武装が貧弱な小さな村などは滅ばされることさえあった。しかしここアルデガンでは訓練を終えたばかりの若者にも組しやすい相手と見なされていた。

コボルトの一頭の突進にアラードはまっこうから立ち向かい、錆びかけた蛮刀の力任せの一撃を剣で受けた。だがほぼ同じ体格の敵の一撃には思いがけぬ勢いがあった。反射的に体をかわすアラードを蛮刀の切っ先がかすめた。バランスを崩した敵に二度切り付けるとコボルトは倒れた。

アラードはあたりを見回した。彼は洞窟の前に広がる砂地に立っていた。正面の洞窟から城壁で三方を囲まれた広場に飛び出てきた敵の一群は、待ち受けていた魔術師たちによってほとんどが眠らされ、残りも戦士たちに切り伏せられていた。

「他愛のないものですね」

興奮したアラードは戦士たちが魔法にかかった敵にとどめをさしている間、魔術師のリーダーであるケレスに声をかけた。

「地の利がこちらにあるからね」

年嵩の魔術師の答えを、だがアラードは気にもとめなかった。

第4章 路上

夜番の者と交代し宿舎に向かう時になってもなおアラードの昂揚は続いていた。だからリアに出会ったときにも、彼女の様子がいつもと違うことに気づけなかった。

「聞いてくれ、リア。洞門番になったんだ！」

アラードは興奮した口調で初めての戦いのことを語った。

「よかったわね、アラード」

リアの声はしかし沈んでいた。ようやくアラードはなにかが変だと気づいた。

「どうかしたのかい？ リア」

「私、旅に出ることになったの」

予想もしなかった言葉を聞いたアラードの驚きは、だが彼女からくわしい話を聞くうちに寂しさに安堵の交じり合った気持ちに変わっていった。幼なじみだった二人はそれぞれが訓練を受けるようになってからも互いに励ましあってきたが、アラード自身はリアに魔物と戦ってほしくなかった。ことに一足先に実戦に出た彼女が戦えなくなったと知ってからでは自殺行為と信じていた。

だからリアが一時的であれ旅に出るなら少なくともその間は魔物

に食い殺されることはないと安心できた。その安堵の大きさは彼自身に驚くほどだった。

「アザリア様がいつしよなら心配ないさ。きっとすべてうまくいくよ」

リアを励ましながらアラードは思った。何を守りたくて戦うのか、自分にとっては疑問の余地などないと。

第5章 洞門

夜空を閃光が切り裂き砂地の上に影をいくつも焼き付けた。

コボルトやオークなどの亜人の一群の急襲だった。彼らは暗がりでも目がきくため動きが早く、若くて経験不足の戦士たちは押されていた。形勢不利と見て取った年嵩の魔術師ケレスが放った目くらましの閃光によって窮地を逃れた者も多く、中には敵に反撃できた者もいたが、ほとんどが手傷を負っていた。

「落ち着け！ 深追いするな！」正面のオークを斬り倒しながらボルドフは叫んだ。すでに十頭近くの亜人を倒していたが、魔物の数は多く勢いが減じる様子はなかった。このまま乱戦が続けば味方にも犠牲が出る。左のコボルトの胴をなぎ右から襲うオークの頭を割りながらボルドフは焦った。だが自分が引き付けた敵が多すぎてすぐに囲みを破るのは無理だった。

再び閃光がほとばしり、ついで砂地全体が真昼ともまがう光に満たされた。援護の魔術師たちがいつせいに明かりの呪文を唱えたのだ。彼らはほとんどが敵を攻撃する呪文を修得していない若者ばかりで目くらましをかけたり敵を眠らせるのがやっとだったが、リーダーのケレスはそれを心得てもっとも効果的なタイミングをみはからって仲間たちに指示を出したのだ。効果は絶大で魔物たちはひるみ、洞窟へ逃げ込むものさえいたため戦士たちは陣形を立て直すことができた。

「深追いするな、追い返せ！」ボルドフは囲みを破り、脅えた亜人たちを蹴散らした。若者たちは氣勢をあげ、魔物たちは総崩れとなり敗走した。戦士たちは陣形を組んだまま亜人たちを洞窟へ追い込んだ。

ボルドフが引き上げを指示するため若者たちに近づこうとしたとき、洞窟から黒い影が躍り出た。

大柄な獅子とも見まがう怪物だった。いや、胴体は獅子そのものだった。だが、その背には分厚い皮におおわれた翼をもち、尾の先には毒々しい汁に濡れた太い刺があった。にもかかわらずその顔は人間に似ていた。その口が大きく裂けると二列に並んだ牙がむき出された。悪夢のような怪物は吠えた。そのおぞましい声は山肌と三方の石壁にこだました。

「マンティコアだ、下がれ！」ボルドフは怒鳴った。だが魔獣は若者たちの只中に踊り込んだ。

たちまち一人が喉笛を噛み裂かれ、二人が翼でなぎ倒され鋭い爪で引き裂かれた。仲間を助けようと切りつけた若者の脇腹を毒針が

えぐった。

ボルドフは浮き足立つ戦士たちをかき分けて魔獣に相對した。怪物は血まみれの牙をむき出して威嚇した。ボルドフは盾を掲げて間合いをとった。

しばし両者は睨みあった。

怪物の油断なさを見て取ったボルドフは敵の攻撃を誘うため盾をわずかに降ろして右脇に隙をみせた。魔獣が跳躍した。

ボルドフは脇腹への突撃を盾でいなしながら剣を大きく左に振った。頭上から襲いかかった猛毒の尾が斬り飛ばされた。

おぞましいほど人間に似た声でマンティコアはわめいた。手負いの魔獣は捨て身の体当たりにてた。

ボルドフは突進する怪物の顔面めがけ全身のバネを効かせて剣をまっすぐ振り下ろした。渾身の一撃は人間まがいの頭部のみか獅子の胸の前半までもぎつくりと断ち割った。

戦士たちは歓声をあげた。痙攣している魔獣の骸に剣を突き立てる者もいた。だが、ボルドフの目は屠られた若者たちに向けられていた。

「なぜだ……」

押し殺した声でボルドフはつぶやいた。その声はやり場のない憤りに満ちていた。

第6章 ラーダ寺院

ボルドフはアルデガンの中央にそびえるラーダ寺院を訪れた。

破邪の神格ラーダを祀る白亜の寺院は高い尖塔を備えていた。これこそ尊師アールダの5つの宝玉のうちの主たる宝玉を頂く塔であり、洞窟の魔物が地中を掘り進み洞窟から脱出することを封じる結界の源であった。

ボルドフは取り次ぎの者に最高指導者であるゴルツ大司教への拝謁を求めた。

大司教の執務室には先客がいた。白い長衣を身にまとったアザリアだった。かつてボルドフはアザリアの支援の下で何度も剣を振るった仲だった。彼らは目礼を交わした。

「用向きは何か、ボルドフ隊長」ゴルツが声をかけた。

大司教ゴルツはすでに髪も長いあごひげも白い老人だった。僧侶の技と魔術師の術の両方を身に付けるべく修行する司教、それは長い年月を修行に費やすことを意味し、20年前にその両方を極めて大司教の称号を得た時ゴルツはすでに50歳になろうとしていた。

以来20年間、ゴルツはアルデガン最高の術者としてしばしば実戦にも出ながら指導力を発揮していた。魔物との消耗戦に陥っているアルデガンでは実戦で発揮される実力こそが権威の裏づけであり、実戦での力の衰えは大司教としての役割の終わりを意味する。だが70歳を前にしたゴルツの老いた肉体を支える意思の力にはまった

く翳りがないことが、緑色の炎のような眼力からもうかがえた。

「洞門にマンティコアが出現し4人の死者が出ました」

ボルドフは抑えた声で報告した。

ゴルツは厳しい顔でうなづいた。

「なぜそんなものが洞門に現れたのか、それを聞きたいというのだな」

「尊師アールダの結界は亜人など人間に近いものより魔獣など人間からかけ離れた存在により強く作用する。マンティコアなどは本来深い階層から容易に上がってこられないはずです」

ボルドフは1歩前に出た。

「結界に異変が起きているとしか思えません」

「四方の塔の宝玉のうち、東と南の宝玉の魔力が変質したことを確認した」ゴルツの表情が陰しさを増した。

「なんと！ それでは……」

「このアルデガンの宝玉を補助しているのは、もはや北の塔の宝玉だけということです」アザリアが応えた。

「25年前の西部地域の内乱において、西の塔の宝玉がその力を求める者たちの争いの最中に失われたのは隊長もご存知ですね。追い詰められた勢力がその力をむりやり解放した結果、凄まじい魔力の暴走で敵味方ともども全滅し、西部地域は今も救いようのない混乱の只中にあります」

「愚行だ」ボルドフは吐き捨てた。

「だが、それ以来宝玉がいかに強力な力の源であるかが天下に知れてしまった」ゴルツが言葉を継いだ。

「東と南の宝玉はかなり前から移されておる。手を出したのは南の大国レドラスの王であろうとわしは見る」

「前からですと！ それも場所もおわかりだったのですか」

「もちろん北の王国ノールドにはこのことを伝え、外交的に問題を解決することを依頼はしていた。しかし国力で勝るレドラスはノールドの呼びかけに応えなかったと聞いている。そしてこたびの変質じゃ」ゴルツは息を継いだ。

「宝玉が何らかの加工を受けたとしか考えられぬ」

「レドラスには野心があると考えざるを得ないでしょう、混乱の続く西部地域か、あるいは東のイーリアの虚を突くつもりかもしれない」アザリアが言葉を継いだ。

「ノールドはレドラスが宝玉を手に行っていることを知っているのですから、レドラスもそう手出しはできないと思います」

「宝玉の効力は場所が移されただけなら保たれる。しかし加工され変質したゆえに効力が失われた。このままではアルデガンは遠からず破られ魔物たちが再び地上に解き放たれる。レドラスには触れてはならぬ力に手を出したことをなんとしても悟らせねばならぬ」

「私はレドラスへの使いとして旅立つよう命を受けました」

アザリアが言った。

「無茶ではありませんか、閣下！」

「でも他に方法はないのよ。それに宝玉が現在どういう状態なのかを確かめる必要もあります。イーリアにも寄って状況を伝えることでレドラスの野心を封じることが出来るかもしれません」

「重大な役目じゃ。そなたの両親は南部出身だったから少しでも耳を傾けてくれればと思うが、それでも危険な役目に違いはない。だが」

ゴルツは首をかしげた。

「リアを連れて行きたいとそなたはいうのか」

「彼女には今のアルデガンのどの魔術師よりも高い魔力の資質があります。でも感応力が高すぎて魔物の魂に触れてしまい、戦うことができません。戦う目的を自分で捉え直すしか克服するすべはありません」

ゴルツはしばしアザリアを見つめたあと首肯した。

「そなたを信頼している。リアにも準備をさせるように」

「ありがとうございます、閣下」

「ボルドフ隊長。聞いてのとおり、アルデガンはこれまでになく由々しき状況にある。洞門の警護さえもはや危険じゃ。十分用心して戦力の損耗を極力抑えることを念頭に置くように」

「心得ました。閣下」

ボルドフとアザリアはゴルツのもとを辞した。

2人は寺院の回廊をしばし無言のまま進んだが、やがてボルドフがぼつりと声をかけた。

「無茶なことを考えているのではないだろうな、アザリア」

「なにをいうの。今の私に何もできないことなどよく知っているはずよ」アザリアが歩みを止めた。

「そしてそのことで我が身を責めている。違うか？」

アザリアが答えないのかまわず、ボルドフは続けた。

「おまえに背中を守られて戦った者なら誰だってわかるさ」

「教え子たちはみんなよくやってくれているとは思うわ。でももうずいぶん長く魔力の素質に優れた人材は出ていない。魔術師はしょせん魔力の水準次第で取りうる行動が定められてしまう。

あと1つの呪文が使えたら救えた命だった、そう思ったことのない教え子なんかいないはずよ。私だって」

アザリアはいつしか両の手を握り締めていた。

「せめて私に実践に出られる力が残されていればと何度思ったか知れないわ！」

「だからリアをつれて行こうというのか」

ボルドフは向き直り、アザリアの顔をまっすぐ見た。

アザリアはうなづいた。

「あの子には最高位の呪文を自在に使いこなす潜在力があるわ。それに年齢以上に思慮深さもある。戦いで味方に犠牲を出さない最高の守り手になる資質があるのよ」

「なるほど、生まれたときから目をかけていたわけだ。おまえの真の後継者というわけか」

「生まれてすぐ母親を亡くしたあの子を初めて見たとき、私は高い魔力のオーラに驚かされた。この子は優れた魔術師になるし、そうでなければならぬ。私はリアの名付け親になり、早くから魔術師としての指導を受けさせた。なんとしても壁を乗り越えてほしいのよ」

「おまえは我ら剣を振るう者にとって最高の魔術師だった」
ボルドフは感慨深げに言った。

「同じ魔術師でもガラリアンは正反対だった。奴は自分の魔力を恃んで敵を滅することしか考えていなかった。確かに奴は多くの魔物を倒した。だが、結局１人で戦っていたようなものだった。我ら戦士のことなど眼中になかった」

ボルドフは言葉を切った。

「ラルダが戦士ローラムに夢中で奴を顧みなかったせいだったのかもしれないが」

「言葉が過ぎるわよ。ボルドフ」アザリアがたしなめた。

「そうだな、別に奴の悪口を言いたかったわけではない」

ボルドフは苦笑したが、すぐに表情を改めた。

「おまえは常に仲間を守ることを考えていた。一步下がったところで戦況を判断し、状況に応じた最善の手段でいくつもの窮地を切り抜けてくれた。アルデガンに魔術師の数あれど、自分が参加した戦いで犠牲者を出したことのない魔術師はおまえぐらいしかいなかった

たはずだ。おまえと共に戦った者は誰もがおまえに感謝しているんだ。

そして今、おまえは多くの魔術師を正しく導いている。今日の戦いであのケレスというリーダーが示した判断はまるでおまえのようだった。確かに魔力の素質に恵まれた者は不足しているかもしれない。だが、だからこそ、おまえの導きがなければアルデガンの魔術師陣は瓦解を免れないはず。違うか？」

ボルドフはアザリアの両肩を、大きい無骨な両手でがっしりと掴んだ。

「今でもおまえはアルデガンにとってなくてはならない存在なんだ。絶対に無理をするな。必ず帰ってきてくれ」

「ありがとう、ボルドフ……」アザリアは声を詰まらせた。

第7章 寄宿舎

アラードと別れたリアはラーダ寺院の隣にある寄宿舎に戻っていた。彼女の部屋は1階だった。5階建の寄宿舎は小さな砦のような造りになっており、年長者になるにつれ下の階を割り当てられる決まりだった。アルデガンに生まれた者の常として、彼女も物心がついたころからこの建物で暮らしてきたのだ。

扉に門をおろすとリアは簡素な寝台にあおむけになり、ラーダの

シンボルが描かれた天井を見つめた。多分集会室からだろう。子供たちがラーダの神にささげる破邪の祈りが、ずうっと上の階からかすかに聞こえていた。

子供たちは小さいうちから僧侶によつて、魔物がいかに邪悪であり、これを滅ぼすのがどれだけ聖なる義務であるかを教えられて育つ。もちろんリアも例外ではなかった。魔物は人間とは異質でかけはなれた存在だと信じていた。

だから自分が焼き殺した魔獣の断末魔に魂を感じたこと自体が彼女には衝撃だった。しかもあの一瞬にさらけだされた魔獣の魂は、狂暴で荒々しくこそあれ人間の魂となんら変わるところがなかった。

自分が考えてはいけないことを考えているのはリアにもわかっていた。魔物たちは敵なのだ。決して人間と相容れぬ、どちらかが滅びるまで戦い続けるほかない相手だとわかってはいた。

しかし今の彼女には、自分が人間であり相手が魔物であるということが、ほんのちよつとしたきつかけで逆でもありえたようなものとしか感じられなかった。かつてリアを支えていた自分への確信というべきものは、あの魔獣の断末魔とともに碎け散つたのだ。

リアの脳裏にアラードの上気した顔が浮かんた。魔物を初めて倒した喜びを語る彼の表情には迷いの影などみじんもなかった。彼がうらやましく思えてならなかった。

アザリアはどうなのだろうかと彼女は思った。魔法を自由に使えた時に、師は魔物との闘いにどう臨んでいたのだろうか。師は戦うことにより自分が救う者たちのことを考えるようにと諭した。その言葉はもちろんリアにも正しいものとして受け取れた。しかし、

それ以上に彼女には、師の思慮深さが何らかの苦しみを克服した結果得られたものであるように感じられたのだ。

旅に出れば師に尋ねる機会もあるだろうかと思ううちに、リアはいつしか眠りへと落ちていった。

異様な悪寒の中、リアはめざめた。暗闇から見慣れた自室の天井がおぼろに浮かびあがる。

ここはアルデガンの中心部、ラーダ寺院に付属する寄宿舎。窓から寺院の尖塔が見えるアルデガンで一番安全な場所……。

その部屋が、いまや妖気に満ちていた。

少女は動けなかった。声も出ず、まばたきさえできず。ただ、研ぎ澄まされた感覚がなにかをとらえた。視野の外、足もとのところに妖気が凝固しつつあった。やがて床にわだかまる闇から気配がのびあがり、のしかかるように迫ってきた。

一瞬、リアの視線が双眸をとらえた。おぼろな影の中に燃える緑色の……。

とたんに双眸が妖光を放ち、リアは意識を失った。

アラードと同期の戦士ガモフはかがり火の燃える城壁の上で見張りに就いていた。背後には隊長のボルドフが立っていた。

ずんぐりした体格のガモフは敏捷さよりは力で戦う資質の持ち主だった。もちろんまだ若く経験不足であるため、ボルドフから見れば未熟さは覆いがたいものだったが、オークやコボルト相手なら今のアラードよりむしろ安定した戦いができた。訓練所でもアラードと張り合ってきたガモフはアラードより先に洞門番に登用され、倒した亜人の数でもアラードに差をつけていた。

しかし洞門が急襲を受けたとの知らせに宿舎から駆けつけたガモフたちを出迎えたものは、亜人とは次元の違う存在だった。

獅子ほどもある醜悪な魔獣の死体。戦いに臨んだ仲間たちの話も凄まじいものだった。それは自分たちの前の班の若者を4人も一瞬で噛み殺し引き裂いたという。

ボルドフがラーダ寺院から戻ったとき、ガモフたちは明らかに動揺していた。事態の悪化を直感していることが見て取れた。

ボルドフはガモフたちを集め、宝玉の結界に異変が起こり魔物の行動への制約が弱まったために強力な魔獣が洞門に現れたことを説明した上で、当分のあいだ夜は城壁の下へは降りずに城壁の上から洞門を見張るよう指示した。そして、今夜は自分も見張りに立つから、1人ずつ交代で見張りに立ち他の者は階下で仮眠をとるよう命じた。

ガモフが見張りに立ったのは、もう少しで空が白みはじめる頃だ

った。

「自分もあんな化け物を倒せるようになれるでしょうか」
ガモフはボルドフに声をかけた。それは仲間たちも一様に隊長に
発した問いだった。

「生き残り、戦い続けねば必ず」
ボルドフもまた、同じ答えをガモフにも返した。

そのときラーダ寺院の見習い僧が城壁の上に現れ、ボルドフを手
招いた。そして近づいたボルドフに小声でなにかを告げた。

ガモフにはその声は聞こえなかったが、ボルドフが顔色を変えた
のがゆらめくかがり火の光でもはつきりと見て取れた。

ボルドフは足早にガモフのところへ戻った。

「ラーダ寺院からの招集だ。すぐに行かねばならん。他の者を起こ
すから見張りをこのまま続けてくれ」
そういうとボルドフは見習い僧とともに階下へ姿を消した。

ついに空が白みはじめた。だがそのせいで洞門の影はかえって深
まったようにガモフには感じられた。

もし洞門に異変が起きたら……。見張りとしての努めというより
むしろ恐怖の念ゆえにガモフはひたすら洞門を凝視していた。だか
ら背後から自分の首筋に伸びてくる、やつれた、しかし鋭い爪をそ
なえた手に、ついに彼は気づけなかった。

第9章 集会所

ラーダ寺院の中央に設けられた広い集会所は高窓から射し込む朝日が白亜の内装に照り映えて輝きに満ちていた。破邪の神格を祀る寺院にとって昇る朝日は闇の克服の象徴であり、その輝きをあまさず取り込み人々を力づけることを目指してすべてが緻密に作られていた。匠の技はいまや最高の効果を発揮し、寺院には影などかけらも残らないはずだった。

だがそこに集う人々の顔をおおう影の深さは、およそ朝日の輝きなどで消し去れるものではなかった。

リアは祭壇近くに設けられた席に腰掛けていた。もともと色白の顔はいまや蠟のように生気を失い、青い瞳はうつろだった。朝日の輝きが淡い金髪にも照り映えていたが、それはその顔に掘り込まれた絶望を無残にきわだたせるばかりだった。そしてか細い首筋には恐怖の刻印が2つ刻まれていた。

それは、吸血鬼の牙の跡だった。

「では、そなたは吸血鬼の姿をはっきりとは見なかったというのか？」

ゴルツを補佐する司教グロスの声は、しかし絶望に魂を凍りつかせたリアには霧のかなたの囁きほどにも届いていなかった。

「重大なことだぞ、なにか思い出せないのか！」

「もうよい、グロス」ゴルツが制した。

「無理を強いても詮無い。だが、たしかに由々しき事態じゃ」

ゴルツはこの場に集うアルデガンの指導者たちを見渡した。

「これまでアルデガン内部に吸血鬼が侵入したことはなかった。我らは今までにない恐るべき状況に置かれている」

「吸血鬼の行方の探索は？」グロスが問うた。

「手を尽くしてはいますが、まだ手係りはありません」

「洞門になにか異変は？」

「夜半前の魔獣が出現した乱戦の時が怪されます。夜の闇に身を溶け込ませて忍び込んだ可能性は否定できません」

「リアが襲われた時刻は？」

「発見されたのは明け方にはまだ間がある頃と聞いています」

「このことは外部に漏れたか？」

「リアを発見した者が複数おりますので、おそらく……」

「大司教閣下！」グロスが、いや、その場に集う指導者すべてがゴルツの言葉を待った。

「すべての者に事実を知らせ今後はまとまって行動するよう告げよ。高僧たちを1人ずつ配置し万全の備えで臨め。疑心にかられ自壊するのは何としても避けねばならぬ」

ゴルツは立ち上がり、リアの前に歩みを進めた。リアはゴルツの顔をおおずと仰ぎ見たが、深く落ち窪んだゴルツの目にどんな表情が浮かんでいるかわからないことはできなかった。

「そなたはもはや転化する定めを免れぬ」

ゴルツの厳しい声がリアの耳朵を打った。

「そなたは生きたまま吸血鬼と化してゆく。いや増す渴きに身を焦がし、ついには身近な者に襲いかかる。そのときそなたは真に魔物の眷属へと身を墮とし、襲われた者はそなたと同じく転化の定めに従われる」

ゴルツは老いにやつれた手に握る錫杖を掲げた。一瞬、それは凄まじい力に満たされた。

「呪われた連鎖は絶たねばならぬ。我はアルデガンの長として、そなたに人として死ぬことを命じる。呪いに穢れた身から魂を解かれ、神の御元へ還りたまえ」錫杖がしだいに輝き始めた。

リアは輝く錫杖を見上げていたが、ゆっくりと目を閉じた。

「よい覚悟じゃ」ゴルツのつぶやく声、そして低い呪文の詠唱が聞こえた。

そのとき激しく扉をたたく音、そして呼ばれる声が聞こえた。「隊長、ボルドフ隊長！」

「アラード」リアは驚いて目を開けた。ゴルツも詠唱を中断していた。

「なんだ、騒々しい！」ボルドフが扉を開けると赤毛の若者が飛び

込んできた。

「見張りのガモフが行方不明です」

「なにっ」

「隊長がこちらへ向かわれてから仲間が見張り台へ上るまでのわずかな間に姿を消したそうです。剣が抜かれたまま、見張り台に落ちていました。ただことではありません！」

「わかった」アラードに比べると、ボルドフはゴルツたちに向き直った。「手掛かりかもしれません。見張り台に向かいます」

「頼むぞ、ボルドフ」グロスが応えた。

「行くぞ、アラード」ボルドフが声をかけた。

「どうした。なにをぐずぐずしている！」

だが、アラードは目を見開いて立ち尽くしていた。

「リア。そんな、リアだったなんて……」

彼はリアの顔色を映したように蒼白になった。

「なにかの間違いですよ、これは。リアが、まさか」

「間違いではない」グロスが答えた。

「真夜中過ぎ、リアは自分の部屋で吸血鬼の牙を受けた。もはや助かるすべはない」

「助かるすべはない？ そんな馬鹿な！」アラードは叫んだ。

「あなたがたはここで何をしていたんですか。ただ集まって話しただけで、何の努力もしないんですか！」

「口が過ぎるぞ、アラード！」ボルドフが怒鳴った。

「おまえは吸血鬼の恐ろしさを知らぬ。我らはまずアルデガンの住人を守らねばならんのだ」

「リア1人を助けられずに何をいうんですか、吸血鬼を倒しさえすれば犠牲者は助かるというじゃありませんか」

「あくまで話だ。確かめた者はおらん」グロスがいった。

「これまで犠牲者が転化するより早く吸血鬼を倒せた例などないのだ」

「だから吸血鬼には手を出さないんですか、野放しにするんですか。だったらこれからいくらでも犠牲者が出るだけじゃないですか！」

アラードのこの言葉はリアの耳朵を貫いた。絶望に凍りついた心が激しくゆさぶられた。自分のこの恐怖、この絶望。これは自分だけを襲うのではない。誰もが恐ろしい牙の餌食になりうる。今夜襲われるのは破邪の祈りを捧げる子供たちかもしれない。

そんなことがあつてはならない！ リアは知らず立ち上がっていた。すべての視線が彼女に集まった。

「私が助かるとはとうてい思えません。死ぬべき身であることは免れないとわかっています。でも……」リアの目から一筋の涙がこぼれた。だが、その目は同時に激しい光を宿していた。

「私のほかにもこんな目にあう人が出るなんて、そんなことには耐えられません！ 私はなんの役にもたてないのですか。誰ひとり守

れず無為に死ぬしかないのですか？」

しばしの重苦しい沈黙の後、やがて白い長衣をまとった人影が立ち上がった。アザリアだった。いつも穏やかなその顔は激しい葛藤に歪んでさえた。

一瞬の逡巡ののち、だがアザリアは口を開いた。

「大司教閣下！ たった1つ、吸血鬼の行方を知る方法があったはずです。1つでも手掛かりを得た上でなんらかの対策を講じるべきです」

「探知の秘術を使えというのか」
ゴルツの言葉にあたりがざわめいた。

「探知の秘術？ なんですか、それは」アラードがたずねた。

「吸血鬼とその犠牲者のいや増す精神感応を利用して、犠牲者の意識をたどることで吸血鬼の意識を探ろうとする術のことよ」

アザリアが答えた。「うまくいけば吸血鬼に気取られずに手掛かりをつかむことができる。でも、それはとても難しいわ」

「失敗すれば吸血鬼に気取られてしまい、最悪の場合は術者が支配される危険もある」グロスの顔は怒気で真っ赤だった。

「そんな危険な術を閣下に使えというのか！」

「しかも犠牲者の負担は大きい」
アザリアの目に、一瞬まぎれもない苦悩が浮かんた。

「自分から吸血鬼の影響下に精神をさらけ出すのと同じなのよ。転化は確実に早まるし、相手に気取られれば最悪の場合、精神を一気に乗っ取られることになるわ」

「そんな、ほかに方法はないんですか！」

アラードの叫びに、アザリアはかぶりを振った。

「アザリア様はその呪文をご存じなのですね」リアがたずねた。

「1度だけ使ったことがあるわ。でもこちらの動きを気取られてしまい、相手に裏をかれて探索は失敗した。そして今の私にはもう二度と唱えられない最高位の呪文。アルデガンで今この術を使えるのは大司教閣下だけ……」

アザリアはリアの前に進み出ると、教え子にして名づけ子である少女の顔をまっすぐ見つめた。リアもまた師の視線を正面から受け止めた。

「成功するかどうかはわからない、しかも魂は確実に危険にさらされる。それでも吸血鬼の居場所1つでも知ろうとすれば、この方法しかないの。」

リア、誰も無理強いはできないことなのよ。あなたが安らかな死を願っても責める者はいないわ」

「私の心は決まっています、アザリア様」

リアは答えるとゴルツの前に額づいた。

「お願いです、どうか私をお役立て下さい。そして私を神の御許へお送り下さい」

「危険すぎます、閣下！」グロスが叫んだ。

「よい、グロス」ゴルツが制した。

「アラードの申すとおり、アルデガンに侵入できる相手を野放しにはできぬ。危険ではあるが手掛かりは欠かせぬ」

ゴルツはリアに祭壇に横になるよう命じた。

「そなたを眠らせ夢を通じて接触する。その方が支配を受けにくいはずじゃ。力を抜き心を空にせよ」

そしてゴルツは呪文を低くつぶやきながらリアの上に身をかがめた。のしかかるように迫るゴルツの落ち窪んだ眼窩に燃える双眸が緑色であると気づく寸前、リアの意識は闇に閉ざされた

第10章 私室

リアは寝台のうえでめざめた。頭の芯にかきまわされたような痛みが残り、奇妙な疲労感が体にまとわりついていた。

自分の部屋でないことはすぐにわかった。彼女は寝台のうえに身を起こした。そのとき扉がひらき、アザリアが水差しを持って入ってきた。

「ここは……？」

「私の部屋よ」アザリアはくんできたばかりの冷たい水をリアにすすめた。

清水の冷たさが頭にかかっていたもやをはらしたとたん、それまでの記憶がよみがえった。「アザリア様！ 探知は成功したんですか？ 吸血鬼はどこに……？」

「あなたは意識を失っていたのよ」

アザリアはリアに落ちつくように身振りで制した。

「意識をなくしたあなたを通じて大司教閣下は吸血鬼が見聞きしているものを探られたの。間違いなく洞窟にいますとおっしゃられたわ」

「いったいどんな相手なのでしょう。何かわかったことは？」

「あの術は術者自身にしか感覚が伝わらないし、深入りしすぎると相手に気づかれてしまうから閣下にもほとんどわからなかったはずよ。でも」アザリアは眉をよせた。

「なにかあつたんですか？」

「閣下はあなたたちといつしよに洞窟へ行くとおっしゃるの」

想像もしていなかった言葉に、リアは呆然としてただアザリアを見つめるばかりだった。そんな彼女にアザリアは気遣わしげな一瞥を向けた。

「閣下は洞窟に入るには人数を少なくして身を隠しながらいくしかない。だから僧侶の癒しや解呪の技、魔術師の術や探知の秘術もすべて身につけた自分がいかなばならないとおっしゃるの。皆は反対したけれど、お聞き入れにならなかったわ」

「敵が手強いと考えておられる……、そうなのですね？」

アザリアはうなづいた。

「そもそも吸血鬼はふつうの剣や魔法では倒せない、いくら倒してもすぐに復活してしまうおそろしい魔物で神聖魔法の解呪の技でその存在を禁じることによってのみ消滅させることができるのは知っているわね。

でもあの術は神の秩序への絶対の信仰にもとづいた意思の力そのもので呪われた存在それ自体を解体しようとする技だから、結局は敵の意思力との力比べになってしまう。閣下があればおっしゃる以上、よほど強大な敵であると察しられたからとしか思えないのよ」

重苦しい沈黙がおとずれた。

自分を襲った黒い影がリアの脳裏にうかんだ。正体も姿も定かならぬそれは、いまや悪意と力のかたまりのように彼女には思えた。洞窟の奥底に待ちうける邪悪の権化のような影と対峙しなければならぬ自分あまりにも小さく無力に思えた。しかも自分はしだいに恐ろしい影の力に取り込まれてゆくのだ。

リアが絶望に打ちひしがれそうになった瞬間、アザリアがぼつりと言った。

「あなたにあやまらなければならないわね」

リアは意表をつかれ、どういふことかとたずねた。

「どちらが、いや、両方ね」アザリアは答えた。

「初めにあなたが宣告を受けたとき、私はあなたが殺されるのを見すごそうとした。でもあなたの嘆願に負けて吸血鬼の意識を探る探知の秘術のことを話してしまった。そのせいであなたは死ぬよりも

つらい旅の門出に立って苦しんでいる」

アザリアは目をそらした。

「結局、私はあなたの絶望を引き伸ばしただけなのよ」

集会場でできごとがリアの心によみがえった。あのときの激しい思いがふたたび燃え上がり、無力感を打ち破った。少女は身を起こし師の手をとった。

「そんなことはありません。アザリア様はチャンスをくださったんです！」

アザリアはリアのひたむきな視線を無言で受けとめていたが、とつぜん少女をぐいと抱きよせた。

思いがけぬ師の行動へのとまどいは、しかし次の瞬間、奇妙に甘い香りへの驚きにとってかわられた。その香りのもたらした欲望がまったく新しいものだったので、自分の知っている香りであることに気づくのにわずかな時間がかかった。

だしぬけにリアは叫び、身をもぎ離れた。それが師の体に脈打つ血の匂いだと悟ったからだ。

「私の友も、アルマもそうだったわ」

アザリアは硬い表情で言った。

「あなたは敵と闘うだけじゃない。時間と、なにより自分自身と闘わなくてはならないのよ」

”アザリア。どうなるの、わたし、こわい……”

アザリアの脳裏にアルマの声が、言葉がよみがえった。栗色の巻き毛の小柄なアルマはアザリアと並び称された魔術師だった。同期生だった2人はすでにアルデガン最高の魔術師に数えられていたが、天分ではむしろアルマの方が上だった。

だがもともと温和な性格のアルマは戦いの修羅場が続く中で神経をすり減らし、なにかとアザリアを頼りにしていた。高位魔術師であつたゆえ彼らは同じパーティに入ることはできず、それぞれが自分の仲間たちの生死を預かる重責を双肩に負い心身を削る戦いを続けていた。

ある時アザリアは過労のあまり高熱を出し命さえ危ぶまれる容態となった。アルマはアザリアの欠けた穴を埋めるためより多くの戦いに駆り出された。

そんなある日、アザリアのパーティに加わったアルマは吸血鬼の毒牙にかかってしまった。仲間たちの死に物狂いの抵抗でなんとか地上に帰還できたものの、ラーダ寺院の一室に閉じ込められるほかなかった。

意識を取り戻したアザリアがこのことを知ったのは、事件からもう幾日も過ぎたあとだった。未だ熱の下がりきらぬ体を引きずり彼女はアルマのもとを訪れた。見るも無残にやつれ果てたアルマの姿にアザリアは思わず彼女を抱き寄せ詫びようとした。

そのときアルマは血の凍るような叫びを上げ、アザリアの腕をもぎ放した。牙の伸びつつある口元を押さえ、恐怖と絶望に塗りつぶ

されようとする目で、打たれたように立ち尽くすアザリアにアルマは言ったのだ。

”アザリア。どうなるの、わたし、こわい……”

アザリアは頭を振って記憶を追いやると、腕にはめていた紫水晶の腕輪をはずした。

「これをつけていくのよ、リア」

「だめです！ それは支えの腕輪……」

「そう、人間の意思の力を高め魔力を強める腕輪。この腕輪のおかげで私はあなたたちに魔法を教えるだけならなんとかこなしてきた」
アザリアの唇にかすかな自嘲がうかんだ。

「だからこそ、今のあなたに必要なのよ。これはあなたの意思を強める。敵の支配の意思や魔力にあなたが抵抗しようとするとき必ず力を与えてくれる」

アザリアはリアの右腕に腕輪をはめた。

「でも、これはあくまで支えにすぎない。あなたに何らかの意思があつてはじめて力を発揮するものなのよ。忘れないで」

「アザリア様、私……」

「いいのよ」アザリアは制した。

「私はこれからアルデガンの外へ行かなくてはならない。人間相手に魔法を使っわけにはいかないのだから」

鐘楼から正午の鐘がきこえてきた。

「もう行かなければならないわ。私も、あなたも」

アザリアは椅子から立ち上がった。

「別々の道に行くことになってしまったけれど、どこかで思いがけない会い方をするような、いえ、そうなりたいものね」

「あの、ひとつだけ教えてください。お友達の方はどうなさったのでしょうか」

リアの問いにアザリアは目を伏せたが、言葉を続けた。

「アルマを襲った吸血鬼は私たちを嘲弄しわざと洞窟の中を逃げ回った。吸血鬼に追いつけぬまま彼女は恐怖に擦り切れて絶望に屈してしまった。そして吸血鬼に精神を乗っ取られて私達に襲いかかった」

アザリアは扉を開けた。

「私がアルマを焼き殺したのよ」

第2部 洞窟の闘い

<目次>

第2部 洞窟の闘い

第1章 洞窟上層

第2章 洞窟中層

第3章 火口

第4章 執務室

- - - - -

第1章 洞窟上層

真昼の光を浴び赤毛を風になびかせながら、アラードはリアとゴルツとともに洞門の前の砂地に立っていた。アラードは体格に合わせた軽い鎧、リアは皮で補強された胴着、ゴルツはラーダの紋章が入った長衣に軽い皮の胸当てという着慣れたいでたちだったが、3人ともその上から灰色のマントをはおっていた。それは魔物に分かりにくくなる隠形の呪文がかけられたものだった。彼らはこれから困難な、ほとんど絶望的な探索に赴こうとしていた。

だが、アラードはいまだに気持ちの整理をつけられずにいた。こ

れまでのなりゆきが何度も心の中をめぐるばかりだった。

あるとき集会所で、祭壇に眠るリアの意識を探ったゴルツは、アルデガンに侵入した吸血鬼が洞窟に戻っていると告げた。

そして驚くべきことに、ゴルツ自身がこれを滅ぼすため洞窟へ赴くといったのだ。

あまりに危険なこの案に多くの者が反対した。とりわけグロスはこれをなんとか翻意させようとした。もしゴルツが斃れることになればアルデガンはどうなるのかと。そのような危険を冒さずとも敵がまたアルデガンへ侵入しようとしたときに水際で倒せばよいではないかと。

「ならぬ！ それではアルデガンに住む者すべてを危険にさらすことになる」

ゴルツは譲らなかった。

「洞窟で戦うならわしが斃れたところで犠牲は1人。だが水際で食いとめられずに侵入を許し、出会う者を片端から牙にかけられたらなんとする！ たちまちアルデガンそのものが瓦解するではないか」

これには誰も反論できなかった。

「吸血鬼を滅ぼすには解呪の技を使うしかない。しかも居場所を探るには探知の秘術も欠かせぬ。この両方を使うことができる者はわししかおらぬ」

「では、せめて護衛を！」

「護衛が勤まるような者はもはやいくらもおらぬ。誰1人欠かすこ

とのできぬ者ばかりじゃ。それに騒ぎになれば敵に感づかれてしまう。他の魔物とはいっさい戦わずに吸血鬼のもとへ赴くしかない。わしがリアを伴い2人でゆく」

「私もいきます！」

アラードは立ち上がった。

「ならぬ。足手まといじゃ」

いい放つゴルツをアラードは睨みつけた。

「閣下はリアに死ねと宣告したではありませんか。くるなといわれ
ても追いかけていきます！」

「いいかげんにしろ！」

ボルドフが怒鳴った。だがアラードは引かなかった。

「閣下もみなさんもリアのことなど考えていません。だから私は絶
対についていきます。誰がなんといおうと！」

ゴルツはアラードを真正面から見すえた。

「リアはすでに覚悟をしておるぞ。そなたも聞いたであろう？ も
はや我が身のためではないと、他の者が餌食になるのが耐えられな
いと申していたのを」

そして、祭壇で眠り続けるリアの側へ歩み寄った。

「……まことに不憫ではある。だが吸血鬼の牙を受けた者の命運は
尽きたも同然。そのことは本人が誰よりもわかっておる。

その上で、リアは我が身の恐怖と絶望が他の者へ振りかからない
ように最後まで戦おうといっておるのじゃ。どれほどの覚悟が必要
か、そなた想像がつくか？

そなたの出る幕ではない！ 覚悟がゆらぐばかりじゃ」

「お待ちください」

アザリアが静かにいった。

「確かにリアは覚悟をしています。でも、親しい者の存在がその支えになることもあるはずです」

アザリアもまた祭壇に歩み寄り、ゴルツに相對した。

「いくら覚悟をしているとはいえまだ15の娘の身。しかもその身はじわじわと人間でないものに变じ、敵の影響力も増してゆくばかり……。本人にとってどれほど恐ろしいことか、かつて私は思い知らされました。とうとう救うことができなかったアルマの姿に……」

アザリアはリアの顔に痛ましそうな視線を向けたが、ふたたびゴルツに目を向けた。

「アラードは洞窟の中では足手まといにすぎないでしょう。でも彼の存在がリアの魂のぎりぎりの危機を左右するかもしれないという気がします。連れていっていただけませんでしょうか」

ゴルツは長い間アザリアの目を見つめたが、ついに重々しく首肯した。

「……そなたがそれほどいうのなら」

「アザリア様！　ありがとうございます……」

アラードは声を弾ませたが、振り向いたアザリアの表情の厳しさに思わず息をのんだ。

「リアを支えるということは、あなたがなにか1つ間違えば逆に苦しめかねないということよ。生やさしいことではないわ」

アザリアは祭壇から離れ、アラードの正面に立った。

「私はとうとうアルマを救えなかった。敵に意識をのつとられて襲いかかる彼女をついにこの手で焼き殺すしかなかった。

あなたも自分の手でリアを殺さなければならなくなるかもしれないのよ。その覚悟はある？」

リアの師であり名付け親でもあるアザリアの言葉にアラードはすぐに答えることができなかった。そんな彼をアザリアはしばし見すえていたが、目を細めるところだった。

「大司教閣下の命令には従いなさい。絶対よ。いいわね！」

アザリアの言葉は厳しかったが、それでもリアを想う気持ちは痛いほど伝わってきた。だからアラードも納得できた。

だが、アザリアが従えというゴルツのことは、どうしても信頼する気になれなかった。リアが目覚めてからゴルツの部屋に2人で呼ばれたときのことを彼はまた思い返した。

「洞窟に入ればそなたにも敵の気配が感じ取れるようになるう、それもしだいに強く。その意味はわかるな？」ゴルツの言葉にはなんの容赦もないとしかアラードには思えなかった。

リアはうなづいた。だがアラードが思ったとおり、その顔から血の気が引いた。

「敵にとつてもそなたの気配が感じやすくなる。単に場所が近くなるだけではなく、そなたの転化が進むからでもある。そなたはやがて敵の所在をおぼろげに感じ取れるようになる。転化が進めば進むほど敵の所在や様子ははっきりとわかるようになるう」

ゴルツの緑色の双眸が鋭い光を帯びた。

「はつきり申ししておく。わしの目的はアルデガンを襲った吸血鬼を滅することじゃ。アルデガンを預かるわしが洞窟に赴く以上、それが最優先となる。そなたがどうなるかはあくまで結果じゃ。わかるな？」

「……わかっています」

リアは応えた。色を無くした唇を固く結び、ゴルツの目を正面から見つめて。

だが、アラードは黙っていられなかった。

「あまりにひどいお言葉ではありませんか、閣下！ リアのことは二の次だとおっしゃるんですか！」

いつのるアラードを、ゴルツはじろりと見た。

「いかにも」

ゴルツが立ち上がった。2人は見下ろされる形になった。

「そなたの思いは当然のことではある。だが吸血鬼が相手では、その思いこそが命取りとなりかねぬ。

2人ともアザリアの話を聞いたであろう？ 自ら親友であった者を殺めるしかなかったというのを」

2人はうなづいた。

「そもそも吸血鬼は他の魔物とは大きく異なる。他の魔物はつまるところ生き物じゃ。亜人にせよ魔獣にせよ生き物としての理の中にある。結局は生きるために我ら人間を食おうとする」

リアがうなづいていた。魔獣の魂を感じたという身には思い当たる話なのかとアラードは思った。

「だが吸血鬼は生き物の理には収まらぬ存在じゃ。むしろ魂への呪縛が肉体を不死たらしめていると捉えるべきであろう。いくら斬り刻んでも死なず、たとえ炎で焼き尽くしても復活してしまう度を越した不死の力は生命ではなく呪いの範疇にあるもの。ゆえに魂を呪縛する不死の力を砕く解呪の技でしか倒せぬのじゃ」

ゴルツの口調も、そんなリアに言い聞かせるようだった。

「そしてあの恐ろしい血への渴望。死ぬことができぬ存在である以上、他の魔物が人の血肉を食らうのとは意味合いが違う。

犠牲者を転化させる力を発揮させるためにこそ与えられた渇きであろう。自らが生き延びるためでなく他の者を自らと同じ身に化生させるために。これまた呪いの範疇にあるとしかいえぬ」

ゴルツの視線がリアからアラードに移された。

「まことに恐るべき呪いじゃ。そしてアルデガンにいる者、特にそなたのような者はとりわけこの呪いの連鎖に陥りやすい」

「どうしてです？ なぜ私がそんな呪いに陥りやすいと！」

アラードはゴルツのまなざしが自分に向けられたことに怒りを覚え声を荒げた。だがゴルツは重々しく続けた。

「人を守るため命がけで魔物と戦う。そなたたちはこの地に生まれ、その使命を叩き込まれて育ったはずじゃ。アルデガンの外で人間と戦ったことのある者はいまやほとんどおらぬ。それゆえあからさまに魔物の姿をした相手であれば勇敢に戦える反面、人の姿をした者であれば刃を向けることさえ意識するしないにかかわらず抵抗があ

る。かなりの手練れでも技が鈍る。

当然じゃ。人と戦うことが使命ではないのだから。守ることを使命とする身であれば、殺す訓練などしてもおらぬのだから。

ましてそれが身近な者の姿をしていれば、昨日まで共に戦った仲間であれば、よほどの覚悟がなければまともに戦えぬ。その力もさりながら吸血鬼はアルデガンの者にとってまことに恐るべき難敵！」

ゴルツはアラードの目を正面から見つめた。

「アザリアほどの者であればこそ友を送ることができたのじゃ。病に伏した己の身代りにさせたという思いに苛まれ、友の恐怖と絶望に寄り添い我がものとして死力を尽くし救おうとしたにもかかわらず力及ばず、全ての希望が潰えた絶望に泣き叫びながらも……。さもなければ一瞬の迷いを突かれ牙にかかったはず。

アザリアが申したであらう。そなたにリアを殺す覚悟があるかと。アザリアの申すのはそれほどの意味じゃ。そなたにできることではあるまい？」

ゴルツの言葉に、アラードはなにもいえなかった。

だがゴルツの視線が、ふとアラードから離れた。

「いや、それではあまりにそなたに酷か。20年前でさえそんな者はいくらもおらんだのだから……」

「だからこそわしは吸血鬼と戦うことも、アルマの事件からはさらわれた者を救いにいくことも禁じた。だが、その直後にまたも吸血鬼にさらわれた者が出た。そして禁じられたにもかかわらずさらわれた者を救おうとして洞窟に単身乗り込んだ者もいた」

「ガラリアン……」

リアのつぶやきにゴルツはうなづいた。

「アザリアから聞いたか。では結果も知っておろう。ガラリアンは凄まじい力で出会う魔物を片端から焼き殺しながら洞窟半ばまで進んだが、結局さらわれた者も吸血鬼も見つけることさえできなかった。あれだけの力をもってしても。」

しかも彼を連れ戻すために後を追ったアザリア共々傷を追い、自身はアルデガンを出奔し、アザリアは呪文を唱えれば死ぬ身となった。1人の愚行が2人もの手練れを失わしめた」

「閣下が禁じなければ、協力して助けにいけばなんとかなったかもしれないじゃないですか。閣下は助けにいく者の気持ちなんかどうでもいいんですか。しょせん他人事なんですか！」

一瞬、ゴルツの激しい眼光がアロードを射すくめた。

「他人事と申すか！　さらわれたのは我が娘じゃ！」

言葉を失ったアロードを見下ろすゴルツの顔は、とてつもなく厳しかった。

「わしは我が娘の救助を禁じた。被害が増えるのがわかりきっている以上それしかなかった。」

アルデガンの長ならば当然のこと。娘であろうと二の次じゃ。今度とて同じこと。

いよいよとなればそなたにはまかせぬ。わしにゆだねよ！」

血も涙もないのか！　それにアルデガンのためとかいいながら復讐が目的じゃないか。リアを個人的な目的を果たす道具にしているだけじゃないか。それでリアのことは二の次だなんて！

思い出しただけで反感がつのった。

そのときリアの哀しげな、不安げな声が聞こえた。

「アザリア様はどこ？ まぶしくて見えないわ……」

「あそこにおられるじゃないか。あの城壁の上に」

アラードは陽光の中ひととき目立つ白い人影を指差した。

「見えないなんて……」

おかしいといいかけて息をのんだ。転化の兆候がすでに顕れている！

アラードは思わず振り返った。ゴルツが厳しい表情でリアを見つめていた。いざとなればゴルツは言葉のとおりいつでも彼女を殺すに違いない。なんのためらいもなく！

その瞬間、アラードの心が定まった。

なにがなんでもリアを守らなければ。死なせてなるもんか！

鐘楼の鐘が鳴った。

「時間じゃ」

ゴルツがいった。

「アラード、そなたは先頭に立て。わしはしんがりじゃ。リアを真ん中にはさんで進む」

城壁の上の人々に見送られて、彼らは洞門をくぐった。

入り口から差し込む陽光に浮かび上がった洞窟は天然のままではなかった。床や壁のそこかしこに人の手が加えられ、特に床は平ら

に整えられており足を取られるような障害物は極力排除されていた。ここが200年前に魔物たちを追いつ込む決戦の場として造られたことはアルデガンに住む誰もが知っていた。

尊師アールダは比較を絶する破邪の力を持つ僧侶だった。彼がほとんど独力で大陸各地の魔物の生き残りをこの極北の地に追いつ込んだときに、当時のノールド王がこの洞窟を整備したと伝えられていた。アールダのそれまでの戦いぶりから、必ずこの洞窟で魔物たちが滅ぶと信じた者は多かったという。

しかし、アールダは幾度かの戦いのあと人々に告げた。洞窟という場所に魔物を追いつ込んだのは誤りであった。この場所では自分の力を以ってしても魔物たちを滅ぼすことはできない。しかも自分は定命の身にすぎずやがては死ぬ。このままでは自分が死んだとたんに魔物たちが外へあふれ出す。自分の命がある間にこの地に城塞都市を築き、自分の力に匹敵する力で魔物たちと対峙できるよう人々を組織しなければならぬ。これがアルデガンの起こりだった。

最初は大陸全土の国々が協力してアルデガンを支えた。しかしアールダがこの世を去って長い年月がたつにつれ、遠方の国々の援助はとだえがちになり、200年過ぎた今ではノールドとその勢力下にある北部地域だけがアルデガンを支えていた。

少し奥へ進むと外からの光は届かなくなった。ゴルツが低い声で呪文を唱えると淡くかそけき明かりが行く手を照らした。

アラードとリアは洞窟の中に入るのは初めてだった。いまでも洞窟の中で戦う場合がなくなつたわけではないが、敵地での不利な戦いにはそれだけの技量が求められた。それでも戦うたびに犠牲者や

行方不明者が出た。行方不明者は吸血鬼にさらわれたのだという憶測も根強かった。

神に仕える身であつたアールダは吸血鬼の存在を決して許さず見つけるそばから滅ぼしたので、この地に追い込まれた魔物の中には吸血鬼はいなかつたと伝えられていた。後の時代に闇を求めて外部から侵入したと考えられていた。魔物が徘徊する洞窟の中では犠牲者の骸はほとんどがよみがえるのを待たずに魔物の餌食となつたため、吸血鬼が棲みついたことに人間たちはかなりの間気づかなかつたのだ。

いまや尊師アールダの時代よりはるかに恐ろしい場所と化した洞窟の闇に思わずアラードは身を震わせた。

そのとき、背後のリアが押し殺された声で告げた。

「なにかいるわ、その岩のかげに！」

アラードは振り向いた。闇を見つめるリアの目がかすかに赤く光つたような気がした。彼はぞつとして向き直り、闇の奥に目をこらした。

だがなにも見えなかつた。彼は数歩前に出た。

岩のかけから突き出た足がようやく見て取れた。

人が倒れている！ 思わずアラードは駆け寄つた。

「ばかもの！ 近づくなっ！」

ゴルツの声を聞いたときにはアラードはうつ伏せに倒れている者の脇に立っていた。鎧の形とずんぐりした体型でそれが誰かはすぐわかつた。

「ガモフ！」「離れる！ アラード！」
とたんに足首が鉄のような力で掴まれた。

身動きできなくなったアラードの目の前で、ガモフがゆっくり身を起こした。半身が起こされたのに続き、顔が振り仰いだ。

アラードは絶叫した。

それはガモフであってガモフでなかった。顔かたちが彼だっただけでそれ以外のものは人格も感情も丸ごと抜け落ちていた。

見開かれた目はアラードに向いていたが何も見ていなかった。魂がからっぽになった空洞だけが目の奥に広がっていた。

あえぐように開いた口は言葉ひとつ紡がず、人のものではありえない鋭い牙がアラードに向けられた。牙に引きずられるようにうつろな顔がせり上がってきた。顎が人間の限界を超えて大きく開いた。

その口にゴルツの手が白木の杭を打ち込んだ！

ガモフだったものの体が膝をついたままのけぞり、アラードを掴んでいた手が離れた。ゴルツはアラードを背後に突き飛ばし、自らもすばやく下がりがりながら唱えていた呪文を完成させた。

白木の杭が爆発するように燃え上がり、動く死体を丸ごと呑み込んだ。炎の中で暴れる人影がみるみる嘗め尽くされた。

「他の魔物に感づかれたはずじゃ、この場を離れるぞ！」

ゴルツの言葉が終わりきらぬうちに、洞窟の奥からざわめきが近づいてきた。3人は枝分かれした細い道に身を潜めた。

最初に姿を現わしたのは亜人たちだった。コボルトやオークが炎に目をしばたかせながら興奮して炎の周りを走りまわった。そこへいくつもの首を持った大蛇が現れ、稲妻のように首を振るとたちまち3匹の亜人に食いついた。亜人たちは恐慌に陥り逃げ出した。大部分が洞窟の奥へ逃げ戻ったが何匹かは出口に向かって走り、大蛇も思いがけない速さで巨体を滑らせ後を追った。亜人も大蛇も炎や敵や走りまわる獲物に気をとられて、隠形の魔力を持つマントに身を包んだ3人にはまったく気づかなかった。

「難物が上がりおったか！ 犠牲が出ねばよいが……」
ゴルツがつぶやいた。

「いまのうちじゃ、先に進むぞ」

しばらく3人は黙って洞窟の奥に進んだが、身を隠せそうな岩の窪みが見つかったのでゴルツは少し休むことを告げた。そしてリアになにか敵の気配を感じないかとたずねた。

「あれからずっと見られているような気がします」
リアの答えを聞いてゴルツが難しい顔でうなづいた。

「やはりガモフを襲ったものがそなたの仇敵か。アルデガンに侵入した吸血鬼は1人であったようじゃな」

「どういうことですか？」アラードがたずねた。

「わしはアルデガンに複数の吸血鬼が侵入した可能性も案じていた」
ゴルツの言葉に2人は息を呑んだ。

「先に襲われたリアが吸い殺されずにいた理由がわからなかったからじゃ。ガモフを吸い尽くすほど渴いていたのであれば助けが入っ

たわけでもないのにリアを吸い残すわけはなかるう。いまも理由は思いつかぬ」

「だが、ガモフを襲ったものが別の吸血鬼であつたなら、ガモフを滅ぼした時点でそやつの中から我らは見えなくなつたはず。同じものであればこそガモフを失つてもそなたの意識を通じて我らを監視できるのじゃ」

「では、あのときガモフに見られていなければ！」

思わず発せられたアロードの問いにゴルツは首肯した。

「まだ敵に気付かれずにすんでいたかもしれぬ。いまさらいつても栓ないが」

自分が軽はずみだつたせいで気づかれたのかっ！

思わずアロードが両手を握りしめた瞬間。

「私も……ああなるのですか？」

リアの呻きに2人は振り返つた。彼女は膝を屈していた。

「あんなふうに、相手が誰かもわからず襲いかかることになるのですか？」

押さえ込もうとするように我が身をきつく抱き絞めながらも震えを止められぬ少女が、涙をたたえた目が彼らを仰ぎ見た。

「もしも牙が伸びはじめておれば、かなりの傷をおつて死んでもよみがえることになるう」ゴルツの声は低かった。

「……もう、遅いんですね」

ついに涙がひとすじこぼれ落ちた。そして口が開かれた。細い牙が伸びかけていた。

「リア！」

アラードは思わず叫んだが、あとの言葉が続かなかった。
それでも彼の叫びでリアは我に返ったようだった。

「すみません。覚悟はしていたつもりだったんです。助かるはずなんてないと……」

リアは立ち上がった。濡れた目に悲愴な決意がみなぎった。

「これでふんぎりがつきました。私は地上へは帰りません。もう帰ってはいけないんです！ この洞窟こそが死に場所です！」

2人を見つめる青い目にあの激しい光が宿った。

「決してこの洞窟から出してはいけません。私も私を襲ったものも！ どちらも滅びなければなりません。もう誰もこんな目にあってはいけないんです！ 最後まで戦って死にます！」

蒼ざめた顔が真正面からゴルツに向けられた。

「いよいよの時は、私の魂をお守りください」

「もとよりそれがわしの務めじゃ、その高き魂を守ることが」

アルデガンの大司教が少女の前に膝まづき、手を取った。

「その身の滅ぶ時、必ずそなたの魂を神の御元へ還す！」

ゴルツの誓いにリアがうなづいた。

・・・その高き魂こそ守られなければならない・・・

アラードの心に、その言葉がこだました。

ガモフのようからっぱのままよみがえるリアの姿が、牙をむき迫る顔の恐ろしい冒流的な幻影が彼を脅かした。

失わせてなるものか、魂を。たとえどんなことをしてでも！

アラードは考えもしなかった、自分の思いがリアやゴルツとわずかながら違いはじめているとは。

第2章 洞窟中層

「体に熱を感じます。炎のすぐそばに立っているような……」
ゴルツの問いかけにリアが答えた。

あれからリアは進んで敵の意識に接触し、手掛かりを得ようとしていた。もはや敵の監視下にあり、自らの身が明らかに変化しつつある絶望的な状況がかえって彼女を駆り立てていた。自分が自分でいられるうちにどこまでのことができるかを死にもの狂いで追い求めようとするその姿にアラードは戦慄すら覚えた。

しかし、そうして得られた手掛かりにははつきりしない点や不可解なところも多かった。

敵の姿や様子はいまだにつかめなかった。視線として感じられるだけだった。ゴルツの話では、牙にかけた者の姿を受けた者が見るのは難しいということだった。受けた者はかけた者の支配の魔力の影響下に置かれるため、見聞きするものについて制限や選別を受けるといったことだった。

しかし、炎のそばにいるような感じというリアの答えはずっと同じだった。それを信じるならば、敵は洞窟に入ったリアが意識の接触を始めてからまったく居場所を変えていないということになる。

「そんなことがあるのでしょうか」リアがいった。

「アザリア様がアルマの仇敵を追ったときは、洞窟の中を嘲けりながら逃げまわられてついに追いつけなかったと聞きました」

「化け物の考えることなんかわかるもんか！」

アラードが吐き捨てた。

「同じ所にじっとしているというなら結構じゃないか。さっさとそこへ行って戦うだけだ！」

「あるいは、われらを待ちつけるか……」

ゴルツの低い声にアラードは背筋がぞくりとした。

「正面きって挑みかかるつもりか」

「われらに負けたりはしないというのですか」

アラードの声がかすれた。

突然、リアが叫んだ。

「なんなの？ これは……。どこなの？」

彼女は立ち上がった。見開いた目が虚空を見つめた。

全身がおこりにかかったように震えだした。

「なぜなの？ なぜ……それほど憎むの？」

その体がふらついた。

「どうした、リア！」

倒れかかるその身をからくも支えたアラードが叫んだ。

「敵に触れたのだな！」ゴルツが険しい目を向けた。

「そなた、なにを見た。なにを感じた！」

「場所が見えました、いえ、見せつけられました……」

リアの声はかすれていた。

「広い洞窟です……。低いけれど大きな火口が地面に口を開けています」

「ここにいて、自分は動かないと、くるがいいと……。憎しみの塊みたいなどす黒い思念が……」

「血に飢えているのでも、嘲けるんでもない、だれかれなしの凄まじい憎悪……。あれが本当に吸血鬼なんですか？ なぜあんなに、まさか、あんな……。思っていたのと全然違う……」

「もうやめろ、リア！ 落ち着くんだ！」

リアの体をゆさぶるアラードの横でゴルツがぼつりとつぶやいた。
「魔獣に魂を感じたその感応力、さては相手が見せる以上のものを見たか。その心象までも……」

ゴルツはリアに向き直ると、その背に手を当て一声鋭く気合を入れた。

激しい震えがようやく収まった。

「この洞窟に口を開けている火口は2つしかない。最深部にあるものはさらに大きく高さもある。そなたが見たのは洞窟の中層にある小さい方の火口のはずじゃ。」

敵は我らの動きを知り、その上で挑みかかっておる。秘密裏に動く意味はもはやない。火口へ急ぐぞ！

「火口に転移するのですか？」

アラードがたずねたが、ゴルツは首を横に振った。

「場所が悪い。あの火口は周りにも炎を吹き上げる亀裂が多く、下手に転移すると炎に焼かれかねぬ。しかも敵の位置もわからぬ以上、相手の目の前に背中をさらす危険もある」

「通路とて同じじゃ。うかつに跳べば魔物の群の中ともなりかねぬ。急ぐが用心せよ！」

3人は走り出した。

魔法の燐光だけを頼りに暗闇の中をどれだけ走ったか、アラードの感覚が薄れ始めたとき、ゴルツが止まるよう命じた。

前方が騒がしかった。種類の違う咆哮が入り乱れた。

「なにかおるぞ。1匹や2匹ではあるまい」

3人は壁をつたいながらしのび寄り、様子をうかがった。

洞窟が広がった地底湖だった。どうやら浅瀬のようだったが、広い窪み全体を水が満たしていた。反対側の水面の少し上に通路が口を開けていた。

その浅い湖で魔物たちが戦っていた。

触手と多くの口を持つクラゲかタコのような怪物の巢に、多頭の魔獣たちが踏み込んだらしかった。触手を持つ怪物のうちずばぬけて大きなものが2匹の魔獣を絞め上げていたが、3匹の魔獣が人間ほどしかない小さな怪物たちを追いまわしていた。怪物の親が2匹の魔獣を絞め殺したときにはその仔の数は半分程度まで減じていた。

「向こうの通路へ転移するぞ。2人ともわしにつかまれ」

呪文が完成するとアラードは力場に包まれたのを感じた。一瞬でそれは終わり、前方からの咆哮が背後に移っていた。

ほっとして走り始めたその足が柔らかいものを踏みつけた。

とたんに腰から下に触手が巻きついた。魔獣に追われた怪物の仔が通路に逃げ込んでいたのだ。ぎざぎざの歯をそなえた触手がいつ

せいに鎌首をもたげた。

アラードは必死で丸い胴体の盛り上がった肉塊に見開いた目らしきものに剣を突き立てた。急所を突かれた怪物は甲高い悲鳴を上げ、牙をそなえた触手が地に落ちた。だが下半身を捕らえた触手の吸盤はまったく離れなかった。

背後から凄まじい咆哮がとどろいた。

「やむをえん！」

ゴルツがひととき複雑な呪文を驚くべき速さで編み上げた。

地底湖に真っ白い光が炸裂し、凄まじい熱風が通路にまで吹き込んだ。アラードは髪の手が焦げたのを感じた。

だが火だるまの異形の影が一つ、通路に跳び込んできた。

形の異なる首のうち2つまでが焦げつき垂れ下がっていたが、角をそなえた1つがまだ生きていた。燃え上がり盲いた魔獣は身動きできぬアラードに突進した。

思わず目を閉じたアラードの耳に肉が裂かれる鈍い音が聞こえた瞬間、巨大な炎の熱がすれすれのところをかすめ、背後の岩に激突した凄まじい音がした。

アラードは振り返った。

魔獣は絶命していた。大きな骸がくすぶっていた。

少し離れたところに華奢な人影が倒れていた！

アラードは言葉にならぬわめき声をあげながら、からみついた触手をめちやくちやに斬り裂いた。勢い余って自らの体に何度も刃を立てたことさえまったく気がつかなかった。

やっとリアの側に駆け寄ったときには、ゴルツが血溜りの横に膝
まずき身をかがめていた。

まだ息はあった。だがもう意識はなかった。
脇腹が大きくえぐられていた。助かりようのない傷だった。

身を投げ出して角にかかった？ 自分を助けるために？
自分がリアを助けるためにきたはずなのに？

受け入れられなかった。

自分が化け物を踏んで、自分が動けなくなって……。
なぜ死にかけているのがリアなんだ！

どうしても受け入れられなかった。

「そなたの高き魂こそ守られなければならぬ」
そうだ、そのとおりだ。失われてはいけないんだ。
だが、声は喉に貼りつき出なかった。

「いまこそ誓いの刻」
……なにをいつているんだ？

「そなたの望みどおり、その魂、神の御元へ還す」
違っただろおおっ！

「この世での苦痛と転化の呪いから解き放たれよ……」
殺すつもりだ！ なんのためらいもなく！

ゴルツはゆつくりと輝く錫杖を掲げた。
死なせてなるもんかっ！！

鈍い音が聞こえた。

いつのまにか、大きな石を手に持っていた。
足下にゴルツが倒れていた。

自分が殴り倒した？　ゴルツ閣下を？
血の気がひいた。石が手から落ちた。

リアを見た。弱く、浅く、苦しげな息をしていた。
だから閣下は殺そうとしたんだ、楽にさせるために！

自分がするしかない……。刃をリアに向けた。

かなりの傷をおって死んでもよみがえることになるう。
ゴルツの言葉が脳裏に浮かんた。

よみがえらないようにするには、どうすれば……。
ゴルツはおそらく亡骸を焼くつもりだったに違いない。
自分にできる技ではない。

首をはねるしかないのか？
刃を少女の細い首に向けた。

手が震え、落ちた剣が音をたてた。

弱まりつつある息が通う口元に細い牙がのぞいた。

アラードの目が釘付けになった。

このままではからっぽのままよみがえる。
魂を失って、体だけが。

ガモフみたいな動く死体になりはてて……。

失わせてなるものか、魂を。たとえどんなことをしてでも！
……この世に留める？　どんなことをしてでも？

牙の伸びつつある口、なにかを求めるような。
なにかだって？　きまっているじゃないか。
よみがえったらガモフみたいに血を求めるんだ！

では、よみがえる前に、死ぬ前に与えれば？

……魂は失われないんじゃない？

異様な悪寒が背を走った。

だがいったん思いついた考えは、もう消えなかった。

リアの息がさらに弱く、浅くなった。
もう時間がない！

右手で剣を逆手に持ち、左の掌を刃に当てた。
震える掌はたちまち裂け、鮮血が刃身に流れた。
牙の伸びた口元に刃先をあてがい、紅の流れを含ませた。

喉が小さく動いた。息が止まり、大きく吸われた。

まぶたが震え、ゆっくり開かれた。
青い目がアラードの顔に焦点を結んだ。

「アラード……？」

リアが身を起こした。脇腹の傷が癒着した。
次の瞬間、その目が驚愕に見開かれた。

「これはなに？ 流れが見える、血の巡りが見えるわ！」

見開かれた目が消えた傷に向けられ、両手がおずおずと口元をなぞった。開いた掌に赤い染みが付いていた。

再びアラードに向けられた視線が血に濡れた刃を認めた。

「まさか、アラード！ なんてこと……っ」

いしかけた言葉が突然とぎれた。

その顔が中空を仰ぎ見た。

「だれ？ だれなの？ 私を笑うのは」

視線が虚空へと向けられた。

「あなたなのね！ 私を牙にかけた！」

敵を見ている！ アラードは思わず数歩近づいた。

「きてはだめ！ 近づかないでっ！」

その動きに気づいたリアが大きく跳び退いた。人間離れた跳躍だった。

「転化してしまった、人間じゃなくなった……」

後じさりしながら、リアが呻いた。

「血の流れが見えてしまった。もう一緒にいられないわ！」
身をひるがえし、洞窟の奥へ続く闇の中へ走り去った。

呆然と立ち尽くすアラードの背後で呻き声がした。

「アラード、そなた、なにを……」

ゴルツが半身を起こしていた。

「リアはどこじゃ……？ なぜおらぬ？」

血染めの剣を認めたその目がリアと同じく見開かれた。

「まさか、そなたリアに血を飲ませたのか！」

ゴルツは跳ね起き、アラードに詰め寄った。

「ばかものっ！ リアを転化させたのか、生きたまま！」

錫杖の一撃がアラードを叩き伏せた。

「自分がなにをしたのかわからぬのかっ！ 吸血鬼の肉体に人間の魂を閉じ込めたのだぞ。毒蜘蛛の背に胡蝶を無残に縫い付けたのだぞ。どれだけ魂が苦しみ歪むか考えもせなんだかっ！」

ゴルツはアラードに背を向け数歩進んで足を止めた。

「火口は右の枝道に入ってすぐじゃ。ついてこい！ そこにおるものも人の心を残して転化したもの、その末路の姿じゃ。初めて探知の術を使ったときわしにはわかった。そなたにもいま見せてやる！」

アラードとゴルツが辿りついたのはそれまでの洞窟とは様子があるで違う場所だった。

それまで洞窟の広がった部分はいくつもあつたが、この場所はずばぬけて広がった。地面にはいくつもの亀裂が走り、赤い光が漏れ出ていた。広大な空間は硫黄の臭いと凄まじい熱気に満ちていた。

空洞の地面の真ん中には楕円形の火口が口を開けていた。地面からの盛り上がりは人の背の2倍程度と低かったが、広さは空洞の地面の半ば近くを占めていた。硫黄を含んだ煙がたえず立ち込め、紅蓮の炎が間欠的に吹き上がった。

その煙と炎を背にして、人影が1つ火口の縁に立っていた。

炎を背にしているため、見上げるアラードの目には顔も姿も判然としなかった。彼は人影の顔の部分に目をこらした。

「目を見てはならぬ！」だしぬけにゴルツがいった。

「お久しぶり、私を見捨てたお父様」

女の声だった。それもていねいな。にもかかわらず、その毒々しさにアラードは身を震わせた。おかげでその言葉の意味を理解するのが一瞬遅れた。

「……お父様？ まさか、閣下！」

「お父様。どうしてラルダと呼んで下さらないの？ 哀れな娘の名前など20年の間にお忘れになった？」

炎がまた吹き上がり、人影は黒々とした残像と化した。その残像の顔の部分に緑色の双眸が燃え上がった。

「わかっているわ。お父様は私を滅ぼしに来たのよ。娘などではない、ただの1匹の化物として！」

そういうと人影は火口の縁から地面にふわりと降り立った。

アラードとさして年の違わぬ娘のようだった。いや、本来ならそうあるべき姿のはずだった。

だがその姿はやつれ、苛まれ、荒んでいた。つややかな美しさを誇ったであろう漆黒の髪はおどろに振り乱され、毒蛇さながらにねじれ、のたうつていた。父親によく似た緑の炎のような強い意志を秘めた目は、しかし毒々しい憎悪に歪んでいた。異様に赤い唇からは鋭い牙がこぼれていた。

間違いなく吸血鬼だった。

だが、ガモフとはまったく違っていた。彼はからっぽだった。本来の人格も記憶も失われた動く死体でしかなかった。

目の前のラルダと名のる吸血鬼は明らかに人格を持っていた。だがそれは彼女のものでありながら、悪意にねじれ歪んでいるのがアラードにさえ感じ取れた。彼はゴルツがいわんとした言葉の意味をようやく悟った。そしてゴルツがここへ来た目的も。

「閣下は最初からご存じだったんですか。アルデガンに侵入した魔物の正体を！」

「そなたなぜ20年もたつたいまになって現れた！」

アラードには応えず、ゴルツはラルダを油断なく見据えながら錫

杖を掲げた。

「仮にも神に仕える者として修行をした身でなんたるありさま。この世での妄執から解かれ、神の御元へ還るがよい！」

瞬間、ラルダの全身から目に見えんばかりの凄まじい怒気が吹き出した。

「私に神などという言葉を吐くな！」

牙をむき出しラルダは叫んだ。だが次の瞬間、その目がすと細められた。

「私を解呪しようというなら神の力にすがらねばならぬはず。お父様は私に尊師アールダにちなんだ名を与えた。私もその名に恥じぬよう尼僧として修行をつんだわ。」

その私がこの洞窟で20年もの間どんな目にあってきたか、それを知っても神にすぐれるならばすがってみせるがいい！」

長い、恐ろしい話が始まった。

「もうすぐ地上だぞ」

若き戦士ローラムがいった。彼は同期の戦士2人とともに前列に立っていた。背が高く貴公子然とした風貌と勇敢な性格ゆえに彼はこのパーティのリーダーに祭り上げられていた。

その後ろに僧侶呪文を極めるのも目前というラルダとそろそろ高位魔術士になろうというグロスが続き、その背後をさらに3人の戦士が守っていた。若いため経験は不足しているものの、かなりの力

を持つパーティだった。

彼らは腕試しのため洞窟に潜り、多くの亜人と3匹の魔獣、1体の巨人を倒して帰還するところだった。誰もが予想外の戦果に高揚していた。

通路を曲がったところで、彼らは行く手に長身の男が1人うつむいて立っているのに出会った。

「誰だ」リーダーのローラムが誰何した。

くく、と嘲笑う声が返った。

「ここは我が住みか。誰何するのはこちらであろう？」

男は顔を上げた。茶色の髪とあご髭の中年の男だった。細身の顔は本来整って見えるのが当然の造作だった。

だが造作が少しづつ、微妙に歪んでいた。その結果凶々しくも嗜虐的な表情が貼りついていった。

「招きもなく土足で踏み入り狼藉を働いたのだ。ただで帰すわけにはゆかぬな」

にいつと歪められた口元から白い牙がむき出された。

「吸血鬼か！」誰もが戦慄した。全員が吸血鬼との遭遇は初めてだった。年長者たちからその恐ろしさをくり返し聞かされ、つい先頃には吸血鬼との戦いは可能な限り避けるとのふれが出されたばかりだった。

だがローラムは命じた。

「敵は1人だ。取り囲んでいつせいに斬り倒せ」

戦いの高揚が残る戦士たちはそれに応じた。

「闇の中で我に刃を向けるか」

男はあざ笑い、やおら片手を上げた。あたりの闇が濃密さを増し、6人の戦士を呑み込んだ。

「いかん！」グロスは明かりの呪文を唱えた。しかし濃密な闇は呪文を無効化した。

「ラルダ！ 解呪の技は？」

「私、まだ使えない！」

2人の術者が焦る間に、剣の打ち合う音は唐突にやんだ。

闇が薄れたとき、男を取り囲んでいた戦士たちは全員倒されていた。誰もがおのおの自分の剣を体に突き立てられていた。

「他愛のない。余興にもならぬ」男は鼻を鳴らし、喉を斬り裂かれて虫の息のローラムに牙を寄せた。

「ローラム！」

ラルダは思わず叫んだ。

その声を聞き付けた男が目を上げた。「ほう、これは」唇を歪めて男は笑った。例えようもなく邪悪な笑みだった。

「この男がよほど気になるとみえる。ならばこの男の命、汝に托す
としよう」

ラルダに歩み寄る男の目が妖しく光ると、ラルダは体がすくみ動けなくなった。

「た、助けを！」グロスは後じさり、その場から駆け去った。

「だめよ、吸血鬼に襲われた者の救助は禁じられたばかりじゃない！グロスーっ！」ラルダの叫びが後を追った。

「ふん、そんな綻ができたのか。つまらぬことだ」

男はまた鼻を鳴らした。

「まあ、この知らせを聞いても人間どもが本当になにもせぬのか見せてもらおうでしょう」

男はラルダの前に立ち、あごに手をかけて上を向かせた。ラルダは恐怖に挫けそうになる心に鞭打って、男を睨みつけた。

「美しい。意志も強い」

男は舌舐めずりせんばかりの声で囁いた。

「汝は殺すまい。吸い殺してしまえば汝の魂は失われ空白のまま肉体のみが蘇えるばかり。それではつまらぬ」

男が喉に口を寄せた。ラルダは絶叫した。

「この香しい血を吸い残すのは惜しいが、それだけ楽しませてもらうねばな……」

牙がずぶりと喉に突き立てられたのを感じた瞬間、ラルダは意識を失った。

甘美な香りにむせながら、ラルダは目覚めた。

自分が狭い場所にいることがわかった。四方どちらを向いても岩肌が見えた。三方は一つながりだったが一方の岩壁の周囲に細い隙間が見えた。岩の窪みを大岩で塞いだようだった。

閉じ込められている？ 岩の中に？ では、なぜ見える？

その瞬間、記憶がよみがえった。

ラルダが思わず立ち上がると、膝から何かが滑り落ちた。

足元にローラムが倒れていた。辛うじて息はあったが長く持たないことは明らかだった。叫びそうになって口に当てた手に何かが触れた。

牙が伸びかけていた。

ラルダは香りが何であるかを悟った。ローラムの喉の傷から今も流れる血の匂いなのだ。

「お目覚めかね」岩の向こうから男の声がした。

「若造の方は覚めるはずもないがな」

「私たちをどうするつもりっ」

ラルダは岩の向こうの相手を呪殺するかのように睨んだ。

「いったはずだ。その男の命、汝に托すと」

含み笑いが聞こえた。

「放っておけばせいぜい一刻でそやつは死ぬ。だが、すでに汝の牙には転化の魔力が備わっている。わかるな？」

自分の血の気の引く音が聞こえた。

「……彼の血を吸わせる気なの？ 私に？」

「命じはせぬ。托したまでだ。何度もいわせるな」

男の声に嘲りが浮き出た。

「むろん汝が耐えられるというなら、それはそれでよいが」

「化物！ 悪魔っ！」

ラルダは叫んだ。大岩を叩く拳がたちまち破れた。

「開けて！ ここから出して！」

「汝の力では動かせぬよ。今は、な」男は声を上げて笑った。

「転化してしまえばわけなく開けられるがな」

そして声はしなくなった。

だがラルダには、自分がどうするかを男が見物していることがわかった。伸びかけた牙をラルダはぎりぎりとはみ締めた。

しばらくそうしているうちに、時間の感覚が薄れてきた。

足元に目を落とした。

ローラムの顔はすでに土気色になりかけていた。

狭い岩穴いっぱい血の香りは充満し、ラルダは麻痺するような感覚に襲われた。牙が疼き、凄まじい渴きが彼女を捉えた。

放っておけばローラムは助からない。

渴きに抗おうとするラルダの耳にそんな声が聞こえた。

「だめ！ できない、そんなこと……」

ならば放っておけばいい。彼は死ねる。あとは自分が1人で化物になるだけのこと。

「1人で……。1人だけで？」

彼の身代わりになりたかったのだろうか？

「あんな男の餌食にしなくなかった。だから叫んでしまった」

自分が化物になりたかったわけではないと？

「当たり前じゃないの！」

だがもう人間として死ぬことはできない。

「……………」

彼は人間として死ねるなら救われる。1人で救われる。

「死なせたりしないわ！　こんなことで、こんなところで！」

なにかが変だ。なにかが間違っている。

ラルダの心のどこかで別の声がした。だが圧倒的な渇きがそれを押し潰した。

ローラムの半身を掻き抱いた。鮮血を間近に感じて牙がさらに伸びた。

心のどこかが悲鳴を上げた。

次の瞬間、牙がローラムの傷口に埋め込まれた。

「どうしたの？ 私……。何をしたの？」

渇きの狂気が去ったあと、ラルダは呻いた。

足元にはローラムの亡骸が転がっていた。

「よく耐えたほうだな」

泣き叫ぶラルダに、大岩の向こうから声がかけられた。

「おかげで若造の魂は失われたようだが」

言葉にならぬ絶叫をあげ、ラルダは大岩につかみかかった。
その身もろとも大岩は倒れ、まっぴたつに割れた。

邪悪な嘲笑を浮かべた男が立っていた。

「ほうら、簡単に開いたろう？」

「殺してやるわ……。許さない！」

血の涙が流れる目に憎悪のありったけを込めて、ラルダは男を睨みつけた。

「無理だな」男は肩をすくめた。

「吸血鬼は吸血鬼を殺せぬ。そもそもめったなことでは死ねぬ。汝が我を殺せぬだけではない。我も汝を殺せぬ」

「だが、牙にかけた者を支配することはできる」

男の目が妖光を放ち、ラルダは金縛りにあつた。

「魂が失われた者は全くの下僕だ。その若造もそのうち空っぽのま蘇る。そこで人間の血を吸えたなら転化を終えられる。めでたく汝の下僕というわけだ」

「冒涇よ！」

「汝が牙にかけたのだぞ」男はあざ笑った。

「こやつは転化できぬよ。汝がここにいた間、若い男が乱入してきて洞窟をだいぶ焦がしたが、魔物に半殺しにされて連れ帰られたばかりだ。当分人間どもは洞窟へは来ぬ。だからこやつは血を吸えずただ死ぬしかない。」

いっっておくが、汝の血を与えてもむだだぞ。汝はもう人間ではないのだからな」

「はじめからわかっていて……っ」

齒噛みするラルダにかまわず、男は続けた。

「だが、生きたまま転化した者は魂を失わぬ。肉体が我の支配に逆らえずとも魂が抗おうとする。だから面白い」

男は牙を、嗜虐的な本性を剥き出して笑った。

「少し前に我が牙を受けながら地上に連れ帰られた娘がいたが、我がもとへ戻る前に魂を擦り切れさせてしまった。アルマ、とか呼ばれていたか。あれでは話にならぬ」

ラルダは蒼白になった。男の本当の目的がなんだったのか彼女はようやく悟った。これが始まりなのだ。

「汝のような者を手に入れることを長い間待ち望んでいたのだ。手

離しはせぬぞ、永劫に……」

ラルダの言葉がとぎれた。

その顔が苦悶に歪んでいた。脳裏に去来するものに耐えるかのよう
に固く目を閉じ、歯を食いしばっていた。伸びた牙が唇を食い破
り、血がしたたり落ちた。

あまりにも無残な話に、アラードは呆然としていた。

ゴルツはどんな思いで聞いているのだろうと思った。だが自分を
庇うように１歩前に立っているゴルツの表情をうかがうことはでき
なかった。

「そしてあいつは、私をありとあらゆる方法で責めなぶった」

絞り出すような声だった。聞く者の耳朵を毒するような呪詛に満
ちていた。

「いうことをきかぬ体に閉じ込められた魂が悶え苦しむのをあいつ
は何より悦んだわ。２０年もの間、私をなぶり苛み飽きることさえ
なかった。憎悪と絶望になすすべもなく私が毒されるのを、歪んで
いくのを、堕ちてゆくのを、あいつは、あいつは……」

ラルダが目をつかつと見開いた。乱れた髪がざあつとざわめき、黒
蛇のようにのたうつた。

「あいつは私に自分で自分の首をもぎ取らせるのをことさら好んだ。

それでも私は死ねなかった。ただただ苦しいだけで、意識が途切れることさえなかった。

どうすれば私は死ねるのか、そればかり考えていたわ。化物として神が私を滅ぼしたもうことを狂気の淵すれすれのところで夢見ていた。私が彼を殺したのだから当然罰が下るはず。下らないはずがないと……。それでも、何度殺されても、私は蘇るばかりだった」

「お父様は私を見捨てた。それだけじゃないわ！ 私があれほど滅びを望んでいたときにとうとう来なかったじゃないっ。それが今になってなに？ 遅いわ！ 遅すぎるっ……」

ラルダの呪詛の声にもゴルツは身じろぎもせず、ただアラードに背を向けて立っていた。

「とうとう私はこの火口に飛び込んだ。溶岩が体を焼き尽くし、骨まで溶けて形を成さなくなったわ。

それでも、いつまでたっても私の意識は消えなかった。あまりの苦痛に耐えられなくなって、私の意識は岩壁を這い上がった。溶けた体が続いたわ、しだいに形を取り戻しながら。長い、長い時間かけて……。

やっと上に辿りついたら、あいつが縁に立っていた。笑っていた。余興だ、よい余興だと。そして私を蹴り落とそうとした」

双眸が凄惨な光をおびた。

「私は夢中で足首を掴んだ。せめて道づれにと、ただそう思って岩壁を蹴った。2人とも落ちた。でも私は途中の岩棚に引っ掛かり、あいつだけが溶岩に落ちたわ」

ラルダは狂ったように笑い出した。

「落ちたのよ、落ちたのよ。初めて私があいつを苦しめることができたのよ！ あいつが悲鳴をあげて燃え尽きるのがわかった。それがやっとな年前のことよ」

「支配の魔力が薄れ、私はついに自由を取り戻したと思ったわ。でも……」

笑い声がやんだ。

「あいつも這い上がってきた、私と同じように。半日ほど時間をかけて。だから岩をぶつけてまた叩き落としてやったわ」

憎悪に満ちた声に、まぎれもない恐怖の色がにじんだ。

「私はここから長く離れることができない。半日もたったら這い上がってくる。そのたびにあいつを叩き落とさなければ私の体はまた支配されてしまう。私はこの世の終わりまでそれを続けて、それでも先に滅びるしかない！」

「なぜ、なぜなんだ……」アラードは思わず呻いた。

「吸血鬼は存在し続けることで力を増してゆくからよ」ラルダが答えた。

「あいつは私より古き者。だから人間が滅んだあとでも私より長く生き延びる。私はついにあいつを超えられない、それが吸血鬼の理……」

「……なぜなの？」

ラルダの声が変わった。底知れぬ怨嗟の呻きだった。

「なぜ、私なの？」
体が震えていた。

「なぜ私がこんな目にあわなければならないの？ これでも神がいるというの？」

ラルダは射ぬくようなまなざしで、ゴルツを真正面から睨みつけた。

「答えてよ！ 答えられないの？ お父様！」

アラードはゴルツの背中が震えているのに気づいた。

「お父様は私に期待していた。だから私も厳しい修行を積んできた。そうよ、神に仕える者として」

「その私をなぜ神は救わなかったの？
なぜこんな身に堕ちなければならなかったの？ よりによって彼の血をむさぼって！」

「なぜ私はこんなに長く、あんな男にあれほどなぶられなければならないなかったの？」

どうしてあいつが滅びるのを見ることができないのよ！

アラードはゴルツの背が縮み、曲がったような気さえた。

「私でなければならなかった理由なんてないわ！ 他の誰かでもよかったはずよ！ 他の人間ならこんな運命を免れていいとでもいうの？ これも神のおぼしめしだというの？」

ラルダの双眸が真っ赤に燃え上がった。

「許さないわ！ 運命を免れる者も、それを許す神も！
ならば私が神の定めた運命をねじ曲げてやるわ！」

ゴルツの背中がぴくりと動いた。

「昨夜あいつを溶岩に落としておいて、私は20年ぶりにアルデガ
ンに戻った。渴きで気が狂いそうだった。あいつは私が狂ってしま
えば面白くないといって自分の吸い残した人間を私に与えたりした
けれど、あいつが溶岩に落ちてからは渴きを癒すことなどできな
かったから」

「それなのに、渴いていたのに、狂いそうだったのに……」

ラルダは目を伏せた。

「20年前、あの日まで暮らした部屋に足が向いたわ……」

血の色の涙が一筋こぼれた。

「わかっていたのに、あの日になんか戻れはしないのに。
それでも帰ってしまった。幻か錯覚さえも感じたくて！
なのにそこには！ その場所には……っ」

燃える双眸が再び見開かれ、虚空を睨み上げた。

「私の部屋にはあの娘がいた。髪も目の色も違う、あの日の私より
ずっと年下の、あの時まだ生まれてもいなかった小娘が！」

「なぜここにいる、ここは私の場所だったのに！　そう思ったら憎くてたまらなくなった。死んでからつぽになるなんてことでは許せなかった！　生やさしすぎたわっ！」

炎の照り返しを受けた牙がざらりと光った。

「私はあの小娘を牙にかけた。気が狂いそうに渴いていたけれどどうにか殺さずにすませたわ。そのかわり、見張りの戦士を一人吸い尽くさなければ収まらなかったけれど」

「でも、どうしても許せなかった。私と違う運命を辿ることなどあってはならないと思ったわ。だからあの小娘の運命をこの牙で私はねじ曲げてやったのよ！」

「それが、そなたの望みか？」

ゴルツの声は、軋むようだった。

「それでも神がいるというなら、それが神の望みよ」

ラルダが応じた。

「この身を愛する者の血さえむさばらずにいられなくしたのも、この牙に運命をねじ曲げる力を与えたのも神なのだから。

そうでしょう？　違うとでもいうの？」

「ならば私は神の与えた力を心のままに振るうまでよ！」

ラルダは両手を広げた。

「解呪できるものならするがいい！　あいつにあればどなぶられながらも抗い続けた私よ。簡単には滅びないわ！」

鋭い爪がめりめりつと伸びた。

「私が勝てば、お父様は私の下僕よ。そのばかな子の喉を裂いて岩穴にいつしよに閉じ込めてあげる。死ぬなんて許さないわ！ 永遠にこの火口であいつの番をさせてやる。」

あいつの心配さえなければ私はアルデガンに戻る。神の御心とやらがどんなものか、誰もが思い知るべきよ！」

「……是非もなし」

ゴルツは呟くと、やおら顔を上げた。縮み曲がったようだった背筋が固く伸ばされるのをアラードは見た。

「わしは確かにそなたを見捨てた。アルデガンの長としてそなたの救出を禁じた。そのせいでそなたはこれほどの地獄に身を置き苦悶した。どれほど恨まれ責められても仕方がない。我が身1つのことならば地獄へ落とされてもよかるつ……」

ゴルツは錫杖を掲げた。

「だが、それゆえアルデガンに、いや、全ての人間に仇をなすとなれば話は別じゃ。己が身を焼く地獄へ他の者をもると共に引き込むというならば、そなたは溶岩に落ちた化物以上におぞましい悪鬼に堕ちたのだぞ！」

錫杖が目もくらむような白い光に燦然と輝いた。

「アルデガンの長として、神に仕える者として、わしはそなたを滅せねばならぬ！」

ゴルツは解呪の印を結び、呪文を唱えた。

「神の意思とやらを試そうというのね。望むところよ！」

鬼相を剥き出してラルダが叫んだ。全身から吹き出すどす黒い妖気にあおられてねじれた黒髪が逆立った。

アラードの目の前で、途方もない力と力が真正面からぶつかりあった。その衝撃は目に見えるかとまがうほどだった。

ゴルツもラルダも身動き一つしなかった。いや、できるはずがなかった。すべての力が精神の嵐となって、互いの存在を、魂をじかに削りあっているのがアラードにさえわかった。思わず彼は膝をつき、己の剣でかろうじて体を支えた。

ゴルツが不利だとアラードは直感した。精神の力はまったく互角、これはおのずと長期戦になる。そうなれば戦いを支える肉体がどれだけの時間に耐えられるか。ゴルツはしょせん老境を迎えた人間。ラルダは不滅の肉体を持つ吸血鬼……。

勝てるはずがない！ アラードは焦った。だが彼にはなすすべがなかった。

ゴルツは戦慄していた。いままで吸血鬼を解剖したことは何度かあったが、ラルダの力はまったく桁違いだった。これまでの相手は死んで転化した者ばかりだった。人間の魂のまま転化して、憎悪と怨念を支えに20年も抵抗を続けてきた意思の力がかくも凄まじいものだったとは！

長期戦になればとうてい勝てぬ。なにがなんでもここで滅ぼさねば！ 焦りを無理やり押さえつけてゴルツはひたすら念をこらした。

だが、ラルダもまた焦っていた。時間がない！ あいつが這い上がってきてしまう……。

たかが人間、それも年寄りと侮ったのが間違いだった。アルデガン最高の術者である父の力はやはり破格のものだった。

なんとかしなければ！ でも、どうすれば……。

そのときラルダは思い出した。この洞窟には自分の牙を受けたあの小娘がいる！

いっそう激しさを増す精神の嵐をしのぎながらラルダは思念で呼ばわった。牙にかけた者へ向かって、自分の意思に従えと。

応えはなかった。ラルダは意識を伸ばしてリアの意識を探り補えた。リアはずっと洞窟の奥の通路にいた。彼女が泣いているとラルダは感じた。堕ちた我が身を嘆いているのだと思った。

「今すぐここへ！ あいつを溶岩に叩き落すのよ。ぐずぐずしないでっ」

「ラルダ。あなたは、なんて、痛ましい……」
リアから切れ切れの思念が返ってきた。

「なに……？ なにをいつているの？ おまえは」

「あなたは心の底で自分を憎んでしまった。愛する人の血をむさぼって転化したことを許せず、あまりにひどい仕打ちに汚され歪めら

れた自分を嫌悪して……。でもあなたは自分を滅ぼせない。だから他の者すべてを憎むほかなくなったのよ」

より明瞭な思念が返ってきた。

「あなたの思いはわかるわ。もし同じ目にあっていれば、きっと私も同じように歪んだと思う。私をこんな身に堕としたあなたただけれど、とうてい憎む気になれない……」

「それはなに？ 同情しているつもり？」ラルダは苛立った。

「ごたくはいいわ、従うのよ！」

「痛ましいラルダ……。でも、従うわけにはいかない」

「なんですって！」

「あなたはたしかに私の運命をねじ曲げた。でも牙が変わえられるのは体だけ。私の心まで、魂まで思いどおりにできるなんて思わないで！」

牙を介して結ばれた意識を通じて、青い目がまっすぐラルダの魂を見つめていた。

「あなただってそのおぞましい男と違うでしょう。心も運命も。当然よ！ それほど憎み呪う相手のまねなんかできるはずがないもの。そいつだって転化させた相手とは似ても似つかないと思うわ。その嗜虐と邪悪さ、死んでからっぽになった者ではないはずよ。ただ渴きのみに駆られて動く者なんかじゃないもの。人間のまま転化して歪んだのよ。あなたとは全然違う形で」

「牙にかかれば人ではなくなる。でも心を、魂を変えるのは牙の力なんかじゃない。だからそいつも、あなたも、私もみんな違うのよ。だったら同じ運命になんか、地獄になんか、誰ひとり落とせるは

「ずがないじゃない！」

ラルダはとつさに応えられなかった。

「あなたも本当はわかってているのよ。わかっているから呪わずにいられないんでしょう？　だれもあなたと運命をともにはできないって。ラルダ、痛ましいあなた……」。

だからこそ、あなたの無念は晴らせない。たとえ全ての人間を牙にかけてもなんにもならない。魂の渴きは癒せない。不毛さに永遠に苛まれるだけよ」

「牙持つ身でありながら何様のつもり？　おまえだって、おまえだっていずれ人間の血をむさぼるしかないくせにっ！」

「私はたしかにこんな身に堕ちた。でも、転化を遂げてしまってたわ。私のは私のまま、いまも私のものだって」

「私は自分が助かりたくてここへきたんじゃない。助かるはずがないと思っただけから。必ず死ぬと思っただけから」。

私の恐怖や絶望を他の誰にも味あわせたくない、ただその思い一つでここまでできたのよ！　私が私である限りこの思いは変わらない。転化を遂げたいまま私の思いは潰えていない」

青い目に宿る激しい光をラルダは感じた。

「だから私は従わない！　みんなに仇なすつもりなら！　たとえあなたがどれだけ強くても、私が逆らって勝てる見込みなんかなくても！」

「小癪な！」怒りのあまり、ラルダの口から思わず声が出た。だがラルダの怒気にも臆せず、リアは続けた。

「あなただってわかってるでしょう？ なにかが違っていれば少なくとも心は、魂はこうではなかったはずだって」

なにかが変だった、なにかが間違っていた。

ラルダの心のどこかで声がした。

あのかなにかが違っていけば……。

「黙れえー……っ!!」

ラルダは絶叫した。驚いて自分を見るゴルツやアラードのことなど、もはや眼中になかった。

「おまえに人の心を残したのが間違いだったというのね。ならばその心、いま握り潰してくれるっ!」

ラルダは圧倒的な思念をリアに振り向けた。

ラルダの気がそれたのをゴルツは見逃さなかった。尽きる寸前の気力を振り絞り、ぎりぎりの一撃を放った。

ラルダが気づいたときはもう遅かった。見えざる刃が魂の中枢を直撃した。肉体を不滅たらしめていた力が碎かれ、彼女の姿は霧のように霞み始めた。

「おのれ、おのれええ……」

身もだえしながらラルダは呻いた。

「なに一つ思いを遂げていない、無念を晴らせて、いないのに。こ

んな、ことで、こんな、ところ、で……」

「もはや、滅びの刻。還れ、神の御許へ……」

膝をつき肩で息をしながら、ゴルツが必死に呼びかけた。

「恨みを、残すな……。妄執から、解かれよラルダ……っ」

「私に、神などと、いう、言葉を、吐、くな……」

散りゆく声をかき集めるようにラルダがいった。

「私は、望む。アルデガン、が、燃え、上がる、のを。呪、う、全、て、の、……者、を……」

その声がついに絶え果てたとき、ラルダの姿は霧散していた。だがアラードには、彼女の無念と呪詛がいつまでも洞窟にこだまを引いているように感じられた。

こだまを追うように見上げたアラードの視線が、そのとき動くものをとらえた。

「閣下！ あれは……」

息を切らし膝を屈していたゴルツも顔を上げた。

火口の上に人影が立っていた。焼けただれ顔も定かでなかったが、それでも見る間に回復しつつあった。

ラルダに仇なした吸血鬼がついに這い上がってきたのだ！

あいつをなんとかしなければ。アラードは焦った。だがラルダとの壮絶な戦いで消耗したゴルツは、まだ立つことさえできずにいた。

やがて溶け崩れた顔に2つの目が開き、彼らを睨みつけた。

「我が牙の人形を、かくも得がたき慰みものを滅せしは汝らか。この小癪な所行への罰を存分に与えんとせしものを……。
ならばせめて汝らに仕置きを与えてくれよう」

それを聞いたアラードは怒りにかられて前にでようとしたが、異様な声に思わず足が止まった。

「き……さ……ま……あ」

アラードにはそれがゴルツの発したものだとは信じられなかった。なにかが彼の知るゴルツとかけ離れていた。いや、そもそも人間が発したものだということさえ受け入れ難い声だった。

ゴルツは息を切らしたまま、錫杖を杖代りに片膝をつき、火口の上の吸血鬼を見上げていた。アラードには崩れた顔の吸血鬼がたじろいだように見えた。

「きさまに、かける言葉など、ない。肉体も魂も、もはや、還る場所など、ないと知れえっ！」

ゴルツの言葉とともに錫杖が輝き始めた、だが火口から吹き上がる焰に映えたせい、アラードには先ほどの白い光とは異なり昏い赤みをおびているように感じられた。

次の瞬間、地に突き立てられた錫杖から稲妻のような激しい閃光が迸った。それは地を走り火口を駆け上がるとまだ本来の姿を取り戻していない吸血鬼を直撃した。

焼け爛れた吸血鬼は消し飛んだ。

ゴルツはついにくずおれた。

「閣下！」アラードは駆け寄り、助け起こそうとゴルツの正面に回りこんだ。だが、差し伸べようとした手が凍りついた。

鬼の顔だった。緑の双眸は憤怒に炯炯と燃え、髪も髭もおどろに振り乱されていた。

ゴルツとの戦いに臨んだラルダの鬼相そのものだった。まるで彼女の怨念が解呪したゴルツに取り憑いたかのようなだった。

「……無念じゃ、もはや限界。リアを追うことはできぬ……」
ゴルツは呻いた。

「まだあれの犠牲者はおらぬ。居場所を探るすべもない。もはやこれまで……」

「アラード、わしの手を取れ。アルデガンへ転移する……」
ゴルツが呪文を唱えると、2人の姿は洞窟からかき消えた。

火口からまた紅蓮の炎が吹き上がり、誰もいなくなった巨大な空洞を乱舞した。

リアが意識を取り戻したのはすべてが終わったあとだった。

あの瞬間、リアは支えの腕輪を握り絞めてラルダの凄まじい思念に抗がおうとした。

しかし吸血鬼の理に逆らい自分を転化させた相手に抗がうのがそもそも無理な上に、ラルダの桁違いの意志力が相手では勝負になら

なかった。最初の一撃でリアは昏倒したのだった。

リアは支えの腕輪に目を落とした。いまだ輝きを失わない腕輪に、しかし亀裂が入っていた。これがなければ一撃で自分は魂を砕かれ、空ろな生ける屍としてさまよい歩いていたはずだった。いや、もう少し攻撃が続いていれば腕輪も砕け散り、同じ結果になっていたに違いない。

だが、そのラルダの存在がぽっかりと消失していた。

リアが意識をどこまで伸ばしても、洞窟の中にはラルダも、溶岩に焼かれたおぞましい男も、その他の吸血鬼もまったく存在が感じ取れなかった。

洞窟に残った吸血鬼は自分だけだと彼女は悟った。

自分がどうすればいいのかリアは途方にくれた。洞窟の探索はなし遂げられ、アルデガンを襲った吸血鬼は滅んだ。だが自分がこんな形で取り残されることなど想像もしていなかった。探索の途中で自分は命をおとすものと思い詰めていたのだった。

まさか人間の心のまま転化してしまうなんて……。

もうアルデガンに戻るわけにはいかない。

私がアルデガンに戻ろうとするときは、それは……。

自分の想像の恐ろしさに彼女は脅えた。

「おまえだっっていずれ人間の血をむさぼるしかないくせに！」

いなくなったラルダの残した呪詛が、それゆえそれ自体の意味を突き付けてきた。思わず呻き、耳を押さえた。

リアは立ち上がり、アルデガンから少しでも離れようと洞窟の奥へと続く下り坂をよろめきながら歩き始めた。

第4章 執務室

アルデガンに戻ったゴルツは指導者たちを招集し、アルデガンを襲った吸血鬼が滅んだこと。しかし、リアが転化を遂げてしまい洞窟の奥へ姿を消したことを報告した。

アラードは集会に同席していたが、特に発言を求められることはなかった。

「まだあれの犠牲者はおらぬ。こちらから居場所を探知することもしできぬ。いまは捨て置くよりすべはない。

だが、いずれ渴きかられ戻ってくるはず。そのときはなんとしても水際で滅ばさねばならぬ。侵入を許してしまえばアルデガンは破滅じゃ」

ゴルツは吸血鬼の脅威が消えていないことに重点を置いて報告して、アルデガンを襲った吸血鬼の正体やリアの転化のいきさつについては巧みに説明を避けた。そのため指導者たちからもそれらに対する質問は出なかった。

アラードは内心ほっとして指導者たちの顔を見渡した。すると一つの視線が自分に向けられているのに気づいた。

ゴルツを補佐する司教グロスだった。彼は話を続けるゴルツにときおり目を向けながらも、アラードに探るような視線を投げかけていた。

グロス！ 突然アラードは気づいた。20年前ラルダが襲われたときに1人逃げかえった魔術士は彼だったのでは？

集会が散会するとアラードの予想どおり、グロスは彼に自分の執務室へくるよう小声で命じた。

グロスの執務室はゴルツの部屋と同じ階にあった、飾りけのないきちんと整頓された部屋だった。頑丈な扉を閉めると部屋の中は仕事に集中するのにふさわしい静寂に包まれた。

グロスは自分の椅子に腰をかけるとアラードにも向いの椅子に座るようにいった。

アラードはグロスと間近に向き合うのは初めてだった。短躯で小太りのグロスはそろそろ髪に白いものが混じり始めていた。実直で実務家肌の人物との評判で、呪文はかなり身につけているといわれていたが、ゴルツが持つような高位の術者特有の威圧をなぜかアラードはグロスに感じなかった。

「アラード、洞窟での出来事を閣下は伏せておられるな。そなたも

口止めされているのか？」

「口止めされているわけではありませんが……。でも、なぜ私に尋ねるのです？ あなたなら閣下に直接尋ねることもできるのでは？」

グロスは答えなかった。だが、その表情に走った微かな動揺をアラードは見逃さなかった。

「閣下に遠慮なさっているのですか？ 心当たりがおりないのでは？」

「尋ねているのは私だ。そなたは答えてくれればよい！」
グロスは声を荒げた。

「アルデガンを襲った吸血鬼は何者だったのだ」

アラードはグロスの目をまっすぐ見つめた。

「お聞きになる覚悟はありますか？」

「長身の……髭のある、恐ろしい男か？」
グロスの声がかすれた。

「たしかにそいつも洞窟にいました。顔は焼けただれていて定かではありませんでしたが」

アラードは答えながら、グロスが恐れている答えがそうではないことに気づいていた。

「でも、アルデガンに侵入したのはそいつではありません」

「では、まさか……」

あえぐグロスに、アラードは告げた。

「ラルダと名乗る女でした。閣下の娘だといっていました」

「ああ、ラルダ……。では、やはり閣下は愛娘を手につけられたのか！」

グロスは呻いた。

「だがなぜだ。あれから20年もたつのに……」

アラードは火口のできごとをグロスに話しはじめた。

「私が……、私が逃げ出したばかりに、あのラルダが……」

話が終わると、グロスは両手で顔を覆った。

「私がラルダを、閣下をも、それほどまでに苦しめてしまったというのか！」

「あなたが逃げなかったとしても、あんな吸血鬼が相手では同じだったのではないですか？」

あまりのグロスの悲嘆ぶりに、アラードはそう声をかけた。

「閣下もそうおっしゃった。行く手をふさがれてしまったのでは同じだったろうと。ローラムたちが突破して逃げのびようとしたところで結果は変わらなかっただろうと。」

無様に逃げ帰った私に、閣下はそなただけでも戻れてよかったとまでおっしゃってくださいました！ 内心どれほど無念であられたらうに……」

グロスは涙を流していた。

「あるとき私は、これからただ閣下のために尽くそうと思った。身も心も捧げようと……。だからこそ司教としての長い修行も始めたのだ。」

だが間に合わなかった。私が解呪の技さえ身につけておれば、閣下が自らラルダを滅するなどということには……」

「なぜ私はかくも無力なのだ！」

アラードはグロスになんといえいいのかわからなかった。

「洞窟から戻られた閣下のご様子は変だった。閣下がただ吸血鬼を滅ぼされただけなら御心がゆるぐようなことはないはず。だが長くお側に仕えた私には、どこかが違って感じられた。まさか、と思った。だが閣下にお聞きすることなどできぬ。だからそなたに尋ねたのだ。だが、ここまで無残なことであつたとは……」

グロスは顔を上げてアラードを見た。

「閣下の御心は危うい。おそらく禁呪の呪いも影を落としているはず」

「禁呪の呪い……？　どういふことですか？」

「そうか、そなたは戦士だったな。知らぬのも無理はない」
自分をなんとか落ち着かせようとしながらグロスが応えた。

「解呪の技はもともと異教徒の呪殺の邪法をもとに作られたものなのだ」

「異教徒の、呪殺の邪法……」

なんとも禍々しい言い方に、思わずアライドは繰り返した。
そんなアライドに、グロスは解呪の技の由来について語りはじめた。

はるかな昔から、破邪の神格ラーダに仕える僧侶たちは魔物を討つ方法を探求してきた。とりわけ吸血鬼を滅する方法の探求は困難を極めた。そしてある時、ついに1つの方法が遠い異郷から持ち帰られた。

だがそれは恐ろしい方法だった。そもそも吸血鬼を滅ぼすために作られたものでさえなかった。

相手の存在を否定する意思の力で肉体どころか魂の水準においてさえ相手がこの世に存在することを禁じるという、あまりにも邪悪な呪殺の技だったのだ。一族を皆殺しにされ自らも目をくりぬかれた1人の男が、仇敵を憎むあまりその後の生涯を費やして魔道を追及した果てに編み出したのが由来だったという。

そもそも自らの教義とまったく相容れぬ邪悪な呪殺の技。しかしそれが肉体よりむしろ魂の水準において相手の存在を禁じるという原理をもつゆえに、いわば魂に不滅の肉体が呪縛された存在である吸血鬼にこれほど有効な方法は他に見つからなかった。

そこでラーダ教団は、長い年月をかけてこの邪法を自らの教義と目的に即したものに作り変えた。対象を吸血鬼に限定し、教義に反する術式の中には宗教的な禁忌を組み込んで歯止めをかけて禁忌を侵さない場合しか術が先に進めないようにした上で、浄化と鎮魂の祈りを織り込んだ。

こうして完成された解呪の技は、ラーダの教えを修めた高僧にか扱えず、術を唱える者の心を試しながら先に進む極めて困難な術式となった……。

「思えば元々は相手を痕跡も残さず滅殺する邪法に浄化と鎮魂の祈りを織り込んだのは矛盾というほかない行為だった。そのためこの技は術者に極端に正しい心と意志力を求めるものになったのだ。それゆえ解呪の技は、単に術式を身につけたからといって扱えるとは限らぬものになった。私も術式を身につけてはいるが、いまだに発動させることができずにいるのだ」

グロスの口調に苦いものが混じった。

「相手の存在を魂にいたるまで抹消しようというのに浄化と鎮魂を捧げる。これは吸血鬼としてのあり方は禁じるがもともと人間として生まれた魂は救済したいということにほかならぬ。だが、おおもとの術式はその魂を破壊しようというものであり、それが吸血鬼の不滅の肉体の呪縛を破る原理であるのだから無理があるとはいえない。髪一筋でも心が逸れれば発動できず、おおもとの邪法に比べれば大きくその威力を削がれた術式。これが解呪の技の実態なのだ」

アラードの脳裏に、ゴルツが焼け爛れた吸血鬼を滅殺したあの凄まじい光景がよみがえった。

「では閣下がラルダの仇を滅ぼした、あの技は！」

「そなたの話を聞く限り、正しい解呪の技の発動ではない」
沈痛な面持ちでグロスが応じた。

「閣下はとうていきやつ魂の救済などというお気持ちにはなれなかったはず。それでは普通なら解呪の技は発動せぬ。だが閣下の憎悪の念があまりにも強かったばかりに、本来の邪法としての形で発動してしまったものと私は見る。さもなくばそなたのいうような状況下で、そのような威力で吸血鬼を滅ぼしうることなどありえぬ！」

「では、さきほどおっしゃった禁呪の呪いというのは……」

アラードの言葉にグロスは首肯した。

「幾重にも術式の中に織り込まれた宗教的な禁忌を、神に仕える身で侵したのだ。術者の心はただではすまぬ。愛娘を我が手で滅ぼした上にそのような痛打を心に受けて、見かけだけでも平静を保っておられること自体が奇跡のようなものだ。この上閣下が解呪の技を使われるとなれば、もはや何が起こるかわからぬ！」

「だが遠からずリアは戻ってくる。転化した身でいつまでも渴きにかられずにいるはずなど……」

いいかけたグロスの言葉がとぎれた。

「……待て。犠牲者がまだいないというなら、リアはなぜ転化を遂げた？ アラード！」

グロスは目を細めた。

「そなた何か知っておろう！」

今度はアラードが動揺する番だった。

「……リアは、私を庇って瀕死の傷を負いました」

アラードは言葉を詰まらせながらいった。

「耐えられませんでした、リアが失われるなんて。私のせいなのに

……。

それで、私の傷からしたたる血を……」

「そなた、なんという！」

いいつのろうとしたグロスの言葉は、しかしとぎれた。

「……いまここでそなたを責めて何になる。いや、そもそも私にそなたを責める資格があるうか。ラルダを見捨てて逃げ、閣下をここまで苦しめた私に……」

グロスは暗澹たる面持ちでつぶやいた。

「閣下にとって、リアはラルダやきやつのような縁の深き者ではない。ラルダのような凄まじい力も持つてはおるまい。解呪するには組し易い相手のはず。それだけがせめてもの救いか……」

もはや言葉もなく向き合う2人の姿を、深まる宵闇がしだいに閉ざしていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0012ba/>

「封魔の城塞アルデガン」

2011年12月31日17時52分発行